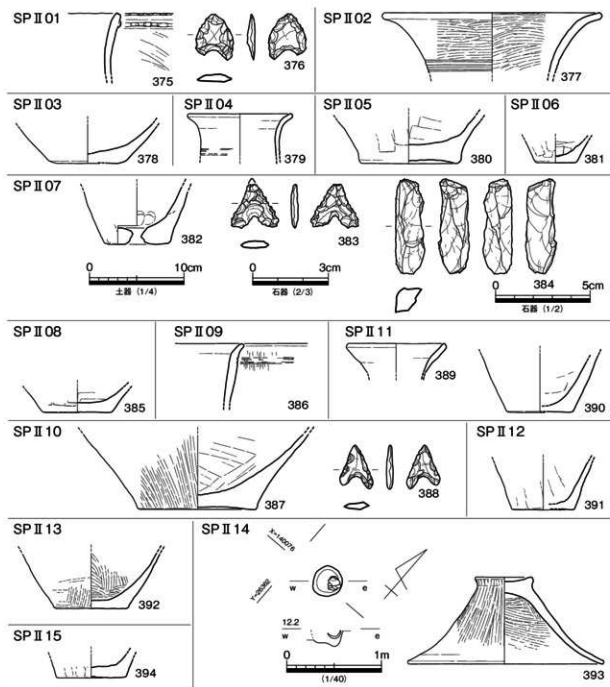


第 63 図 II 区弥生時代前期遺構 平面図

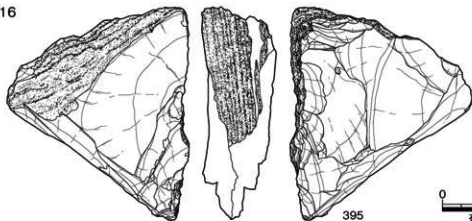


第64図 SP II 01～II 15 出土遺物実測図

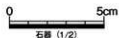
377はSP II 02出土のもので、壺口縁部である。頸部に3条以上のヘラ描き沈線が巡る。378はSP II 03出土、379はSP II 04出土の壺である。380はSP II 05出土の壺、381はSP II 06出土の甕、382～384はSP II 07出土のもので、382は焼成後に穿孔した甕、383は凹基式の石鏃、384は形態から剝片化した楔形石器と考える。385はSP II 08出土の壺、386は如意状口縁の甕である。SP II 10からは壺底部と風化した凹基式の石鏃が出土している。389はSP II 11出土の壺の口縁部と甕底部である。391はSP II 12出土の甕、392はSP II 13（位置不明）出土の壺である。SP II 14からは完形に近い蓋が倒立した状態で出土している。SP II 15からは甕（394）が出土している。

第65図395～398は、伴出した遺物細片の胎土が砂粒の多い前期の特徴を示すことから弥生時代前

SP II 16



395

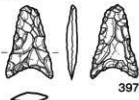


SP II 17

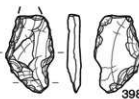


396

SP II 18



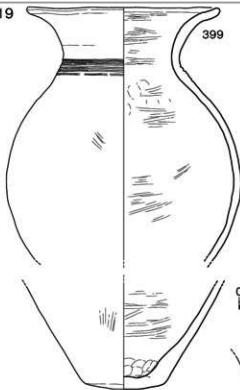
397



398



SP II 19



399



400

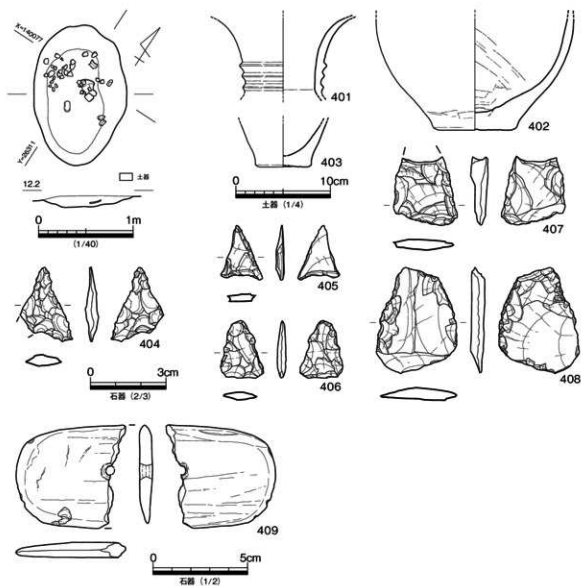
第 65 図 SP II 16 ~ II 19 出土遺物実測図

期の遺構出土と判断したものである。SP II 16 の 395 は石核、396 (SP II 17)、397 (SP II 18) は凹基式の石鎌、398 (SP II 18) は形状から凸基式の石鎌の未完成品と考える。SP II 19 からは完形に近い壺 (399) が出土している。出土状況の写真によると破砕して破片となったものが折り重なって埋まっている。SP II 19 からは甕の底部 (400) も出土している。399 の壺は胴部中央付近に最大径があり、縦に長い楕円形の胴部から頸部中央を境に対称となる形状に外反する口縁となる。頸部中央下側にヘラ描き沈線 6 条を巡らす。

土坑

SK II 01

II 区(平成 7 年度調査区)西北隅付近で検出した土坑である。長軸 1.5、短軸 0.92m の楕円形の平面形で、断面形は浅い皿形、深さ 11cm を測る。小ザル 1 杯分ほどの遺物が拳大以下の砂岩礫多数と共に出土し



第66図 SK II 01 平・断面図、出土遺物実測図

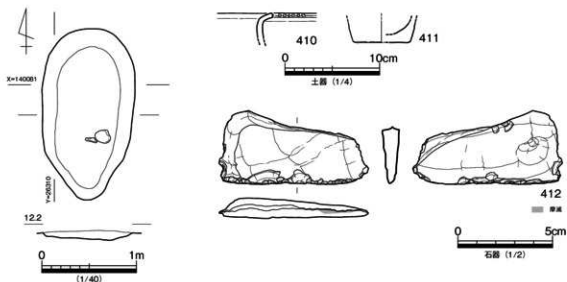
ている。土器片は胎土の特徴からすべて弥生時代前期と見られる。第66図401～409は、SK II 01出土の遺物実測図である。401は壺の頸部である。3条の突帯を巡らせている。402は壺、403は甕の底部である。404は凹基式の石鏃である。405は両側縁ともに剝片の割れ面の状態で、細部調整の行われていない未成品である。406は平基式の石鏃。剥離が全体的に粗く、整った形状となっていない。407は下方から刃部の細部調整中に折損し放棄した未成品と見られる。408も石鏃の未成品である。各側縁とも片面から押圧剥離を加えているのみである。全体として歪んだ形状であることも未成品と考える根拠である。409は結晶片岩製の磨製石庖丁の破片である。

SK II 01 出土遺物で注目されるのは、石鏃の未成品が複数含まれていることである。未図化遺物には40点弱のサヌカイトの剝片、チップが含まれており、石器製作にかかわる不要物を廃棄している可能性が考えられる。東北東に16m離れた位置にあるSK II 03は後述するように多量のサヌカイトのチップとともに未成品と考えられるものが出土しており、また、東北に13m離れた位置にあるSK II 09にも多量のサヌカイトのチップが含まれており、弥生時代前期に石器が製作されていた可能性が高いこと

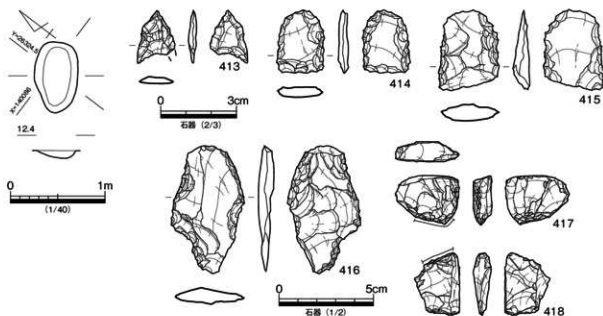
を示している。

SK II 02

Ⅱ区（平成7年度調査区）の西北隅付近で検出した土坑である。長軸をほぼ南北方向にむけ、長軸1.8、短軸0.9mの楕円形の平面形、断面形は浅い皿状で深さは10cmを測る。底は下層の砂礫層が露出する。小破片を主体とする遺物が少量出土している。第67図410は口縁端部に刻み目を施す如意状口縁の髷、411は髷の底部である。412は削器、背面から側縁は剥片の割れ面のままである。また、刃部は潰れている。



第67図 SK II 02 平・断面図、出土遺物実測図



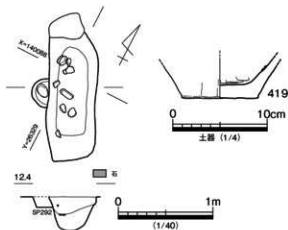
第68図 SK II 03 平・断面図、出土遺物実測図

## SK II 03

II区（平成7年度調査区）の西北部で検出した土坑である。長軸74、短軸43cmの楕円形の平面形で、断面は浅い碗状を呈し、深さ8cmを測る。埋土は粒径2～3cmのベースブロックを少量含む黒褐色粘質シルトの単層である。SK II 03からは数点の弥生土器小片と数点の石器および石器未成品のほか、約3,000点のササカイトの剝片・チップが出土している。

第68図413～418はSK II 03出土の遺物実測図である。413は凹基式の石鏃、側縁に抉りを入れた五角形鏃である。414、415は石鏃未成品と考える。414は先端部の折損、415は側縁の細部調整中に放棄されたようである。416は打製石斧とした。基部の側縁は仕上げられているが、刃部が折損している。未成品である可能性もある。417、418は楔形石器である。417の打撃痕は不明瞭であるが、下辺に微細な階段状剥離が見られる。418は上辺に敲打による階段状剥離、刃潰れ、下辺に微細な階段状剥離が見られる。

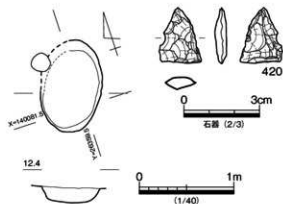
SK II 03は石器製作時に生じた不用物を廃棄した土坑と考えられる。出土土器片から年代を知ることにはできないが、近辺において石鏃未成品複数を出土したSK II 01や、剝片・チップを多く検出しているSK II 09との類似性から弥生時代前期の遺構と判断できる。なお、出土したササカイトチップの石材同定分析を行っている。



第69図 SK II 04 平・断面図、出土遺物実測図

## SK II 04

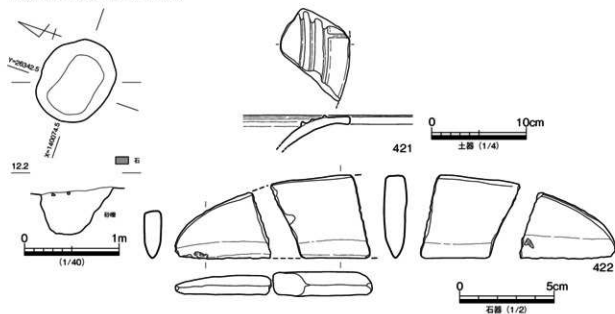
II区（平成7年度調査区）西部で検出した土坑である。長辺155、短辺50cmの隅丸長方形を呈し、断面形はU字形、深さ35cmを測る。微量の遺物と数点の砂岩垂円礫が出土している。壺底部（第69図419）が出土しており、未図化遺物の様相と合わせ弥生時代前期の遺構と判断する。



第70図 SK II 05 平・断面図、出土遺物実測図

## SK II 05

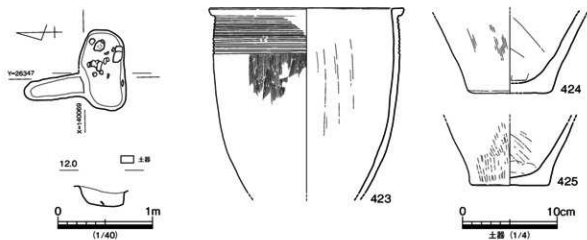
II区（平成7年度調査区）東部で検出した土坑である。長軸94、短軸60cmの楕円形の平面形で、断面形は浅いU字形、深さ15cmを測る。微量の弥生土器片と石鏃（420）が出土している。第70図420は平基式の石鏃で、側縁に抉りを入れた五角形鏃である。出土遺物の胎土の様相から弥生時代前期の遺構と判断する。



第 71 図 SK II 06 平・断面図、出土遺物実測図

### SK II 06

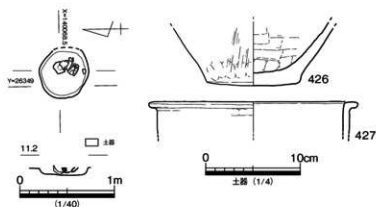
II 区 (平成 7 年度調査区) で検出した土坑である。中世の SD II 04 の溝底で検出した。径 80～98 cm の不整形円の平面形で、断面形は U 字形、深さ 45cm を測る。検出面の 10cm ほど下に砂礫層が現れ、この砂礫層を掘り込んでいる。このため微量であるが湧水が見られる。第 71 図 421 は壺の口縁部である。内面に突帯を貼付け文様帯を構成する。422 は半月形の磨製石庖丁の破片である。このほか微量の遺物が出土している。未図化石物の胎土の様相も合わせて、SK II 06 は弥生時代前期の遺構と判断する。



第 72 図 SK II 07 平・断面図、出土遺物実測図

### SK II 07

II 区 (平成 7 年度調査区) 南端の SR II 02 北岸付近で検出した土坑である。長軸 88、短軸 50cm の楕円形の平面形で、断面形は浅い U 字形、深さ 15cm の規模である。第 72 図 423～425 は SK II 07 出土の遺物実測図である。423 は逆 L 字状口縁の堯で 11 条のへら描き沈線を巡らす。424、425 は堯の底部である。このほか 40 片弱の土器細片が出土しているが、胎土の様相から見て弥生時代前期の遺構と判断する。



第73図 SK II 08 平・断面図、出土遺物実測図

## SK II 08

II区（平成7年度調査区）の南端のSR II 02北岸付近で検出した土坑である。径52～60cmの円形で、断面形は皿状、深さ7cmを測る。壺の底部の上部に甕が破片となって出土している。第73図426は壺底部、427は逆L字状口縁の甕である。このほか少量出土している遺物片から見て弥生時代前期の遺構と判断する。

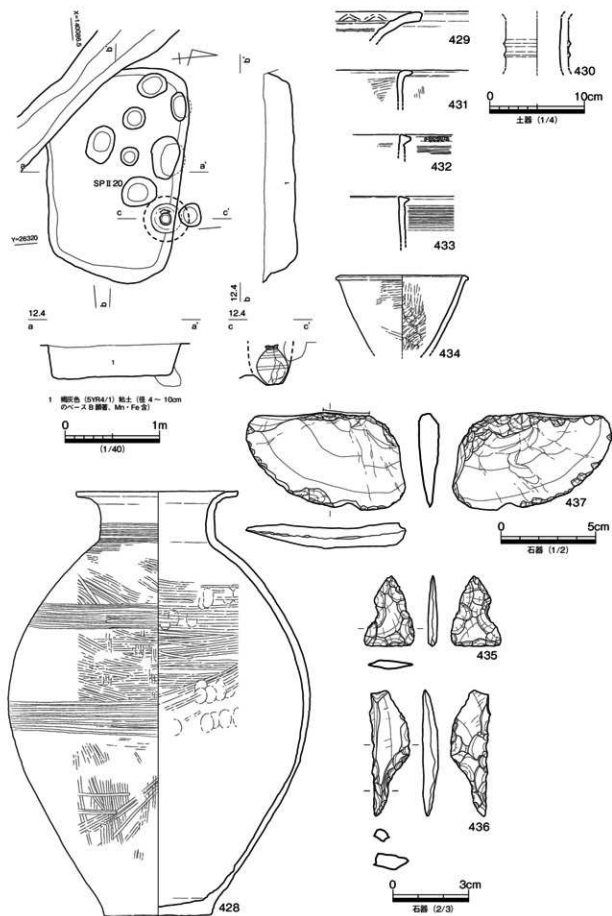
## SK II 09

II区（平成7年度調査区）の西北部で検出した土坑である。長辺225、短辺142cmほどの規模でややいびつな隅丸長方形の平面形である。断面は鋭角の掘り込みで底部が広く水平をなす深い皿状を呈する。深さは32cmを測る。本土坑の底場から7基のビットを検出している。さらに北辺付近で弥生時代前期の完形の壺が据え置かれた状態で出土している（428）。この土器も底場を10cmほど掘り込んで据えられていることからビットに伴うと考えられる。全体で小ザル一杯ほどの弥生土器細片が出土しているほか、約860点に及ぶサヌカイトの割片・チップが出土している。土器片の胎土は弥生時代前期の様相を示す。

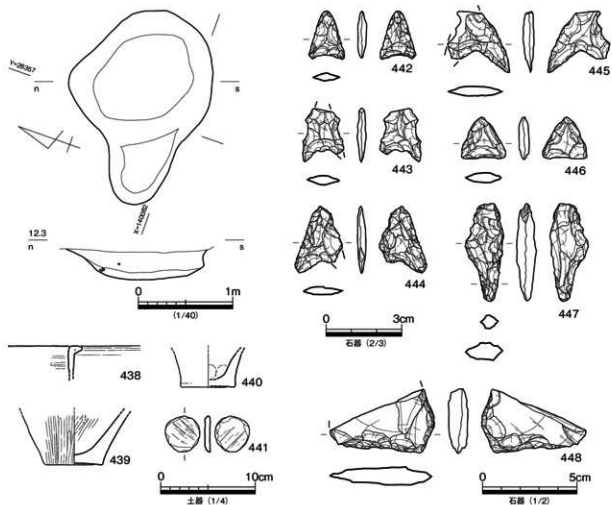
SK II 09のように検出段階で土坑と認識したものを掘り上げると複数のビットが検出されるものが弥生時代前期の遺構に見られるが、本例は石器製作に係る不要物を廃棄した土坑という性格も合わせもつようである。

第74図428～437はSK II 09出土の遺物実測図である。428は先述した完形の壺である。頸部は直立し短く外反する口縁を有する。胴部最大径は中位にあり、頸部と同程度の径の平底の底部をもつ。胴部は長胴である。頸胴部の境界に5条ほど、胴部最大径部に8条、両者の中間の肩部に7条のヘラ描き沈線を巡らせている。429は口縁内面に2条の突帯を貼付け、その外周にヘラ描きによる鋸歯文を描く壺である。430は頸部に2条の突帯を付す壺、431は逆L字状口縁の甕である。431は土坑底で検出したSP II 20から出土した。434は鉢である。435は平基式の石鏃、436は石錐、437は外湾する刃部をもつ削器である。





第74図 SK II 09 平・断面図、出土遺物実測図



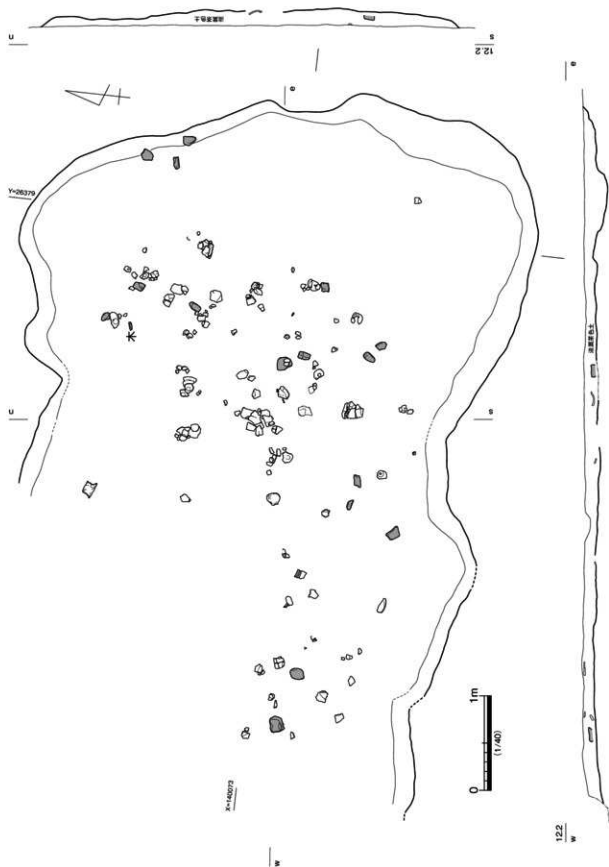
第75図 SX II 01 平・断面図、出土遺物実測図

## その他の遺構

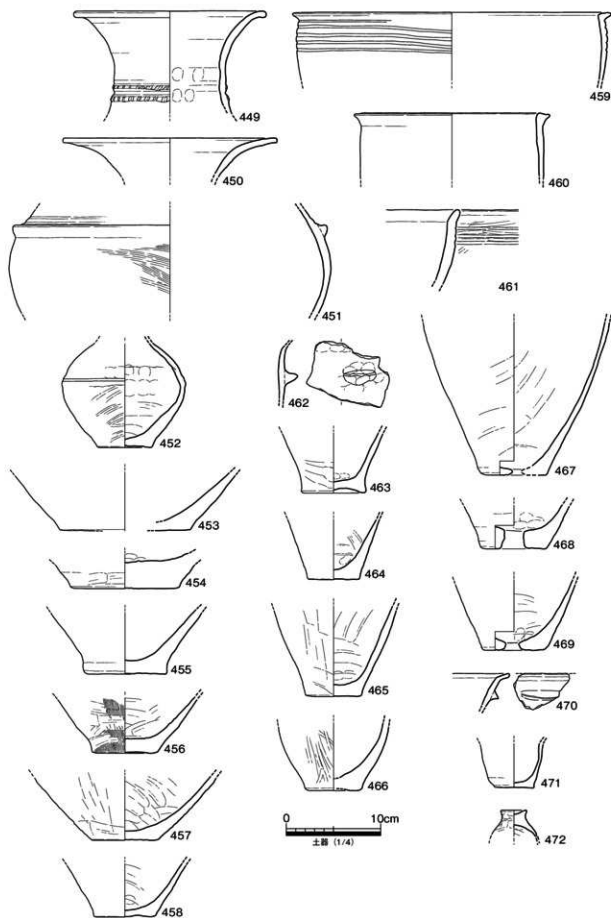
## SX II 01

Ⅱ区（平成7年度調査区）で検出した落ち込みである。長軸150、短軸120cmほどの楕円形の落ち込みの西側に長さ80、幅70cmほどの突出が付く平面形である。断面形は浅い椀状で、楕円形部で30、突出部で12cmほどの深さである。図化した遺物のほかに微量の土器片が出土しているが、弥生時代前期の遺構と判断する。

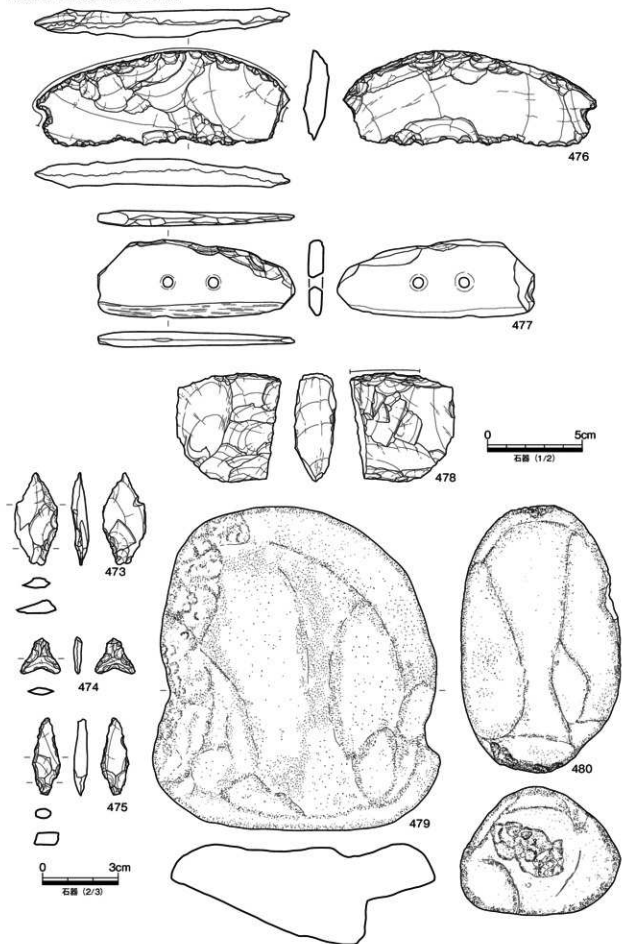
第75図438～448はSX II 01出土の遺物実測図である。438～440は堿、441は円盤状土製品である。442～446は石鏃、443は側縁に抉りを入れた五角形鏃である。447は、一側縁は割れ面をそのまま利用した石鏃である。448の下辺は階段状剥離が卓越するが、摩擦が見られることから打製石斧の刃部と考える。



第76図 SX II 02 平・断面図



第 77 図 SX II 02 出土遺物実測図 (1)



第 78 図 SX II 02 出土遺物実測図 (2)

## SX II 02

SX II 03の西側に位置する不整形の落ち込み(第76図)である。長軸約11m、短軸約5mの不整形な隅丸長方形の平面形で、深さ10～30cmほどの規模である。28<sup>2</sup>コンテナ8箱分の遺物と拳大以下の砂岩亜円礫多数を包含する。遺物の出土に偏在する傾向は無く、全体に破片が散在する様相である。

第77、78図449～480はSX II 02出土の遺物実測図である。449、450は広口壺、449は頸部に刻み目のある突帯2条を貼り付けている。451は壺の胴部である。最大径より上位に突帯を貼付け、その上位に2条以上のヘラ描き沈線を巡らせている。459～462は壺の口縁部である。461の口縁端部は剥落している。462は口縁直下に把手状の小突起を付している。470も把手状の小突起を付すもので、鉢と考える。471も鉢、472はミニチュアの台付鉢である。473は石鏃の未成品、476は背部が円弧状をなす打裂石庖丁である。477は磨製石庖丁、478は上辺に顕著な潰れ、下辺には鋭利な刃部の一部に微細な階段状剥離が見られることから楔形石器とした。なお、形状から打裂石斧の基部が転用されていると思われる。479は凹石である。偏平な砂岩亜円礫の中央部に凹みが見られる。480は砂岩亜円礫の敲石である。

SX II 02も、SX II 03と同様に落ち込みに遺物や自然石を投棄した性格が推定できる。

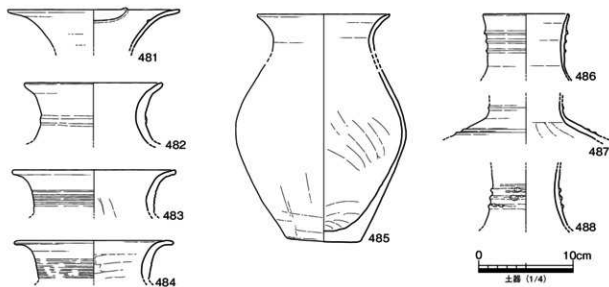
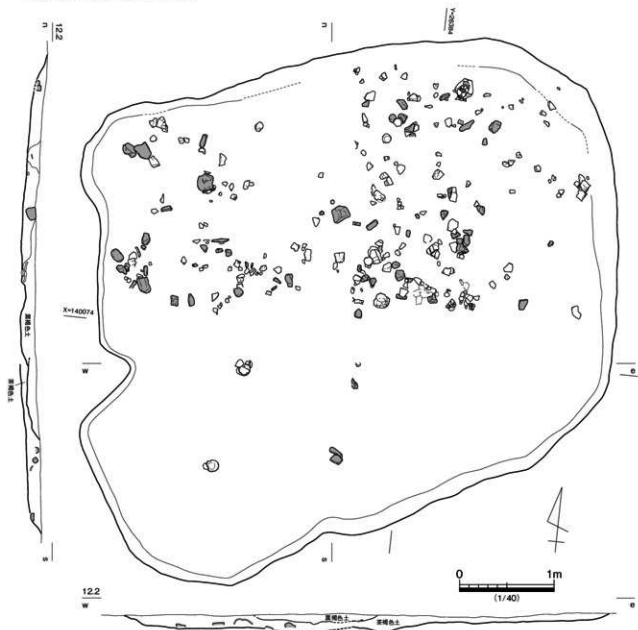
## SX II 03

II区の東部では、平面形が整わず、浅い落ち込みを2基並んで検出している。このうち東側のものは、東辺を上底、西辺を下底とする不整形な隅丸台形の平面形を呈する。東辺3.5、西辺5.0、東西幅5.5mほどの規模である。断面形は非常に浅い皿状で、深さは10～15cm程度である。SX II 03には北半部を中心に完形の土器や石器を含む遺物と拳大の砂岩亜円礫多数を検出している。出土遺物量は28<sup>2</sup>コンテナ5箱である。

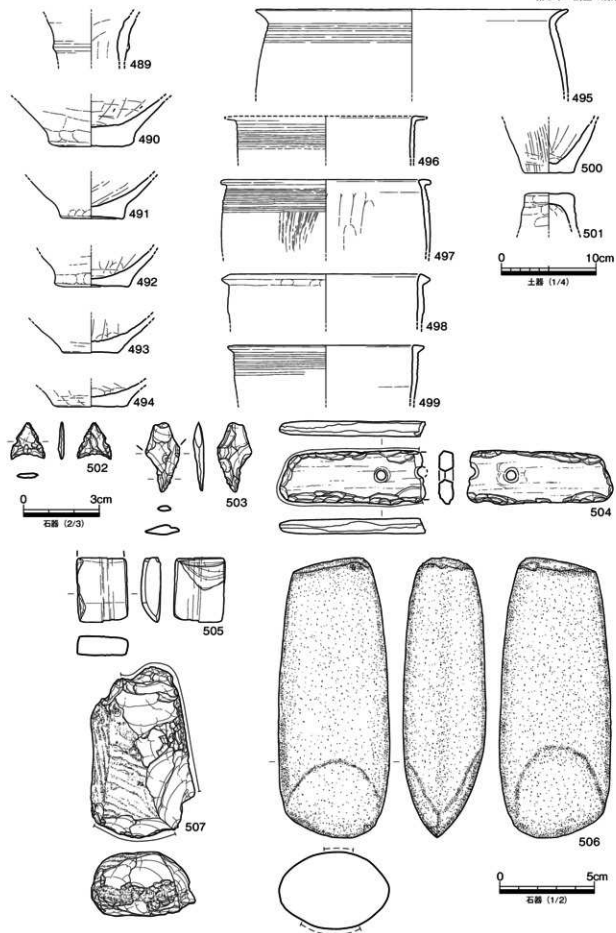
第79図481～485は広口壺である。481は口縁部内面に貼付け突帯による文様帯が見られる。482は頸部に幅広の貼付け突帯を1条巡らせている。483は頸部に5条以上、484は7条以上のヘラ描き沈線が巡る。485はほぼ完形で出土したもので、胴部中位に最大径をもち、明瞭な頸部をもたずに短く開く口縁に移行している。486は短頸壺である。3条の貼付け突帯を巡らせている。487は胴部に比し細い頸部を有する長頸壺である。胴部上半に2条、頸部に1条(現状)の貼付け突帯が巡る。488も長頸壺の頸部と思われる。刻み目のある貼付け突帯を3条巡らせている。第80図495～499は壺の口縁部である。495が如意状口縁であるほかは逆し字状口縁、沈線はすべてヘラ描きである。

502は側縁に抉りを入れた五角形鏃、503は石鏃、504は緑泥片岩製の石庖丁である。504の背面と刃部は剥離によって整形する。505は緑泥片岩製の扁平片刃石斧、506は厚さ4.1cmを測る太型蛤刃石斧である。507はサヌカイトの敲石。短側面の上下辺と一長側縁が潰れている。第81図508～510は石核とした。511～513は砂岩亜円礫の敲石である。

SX II 03は、北半部に遺物および自然石が集中する様子が見られることから、微高地にあたる北側から遺物を落ち込みに廃棄した性格を推定できる。遺物は長頸壺や短頸壺が含まれることから真鍋I-5期に所属する。

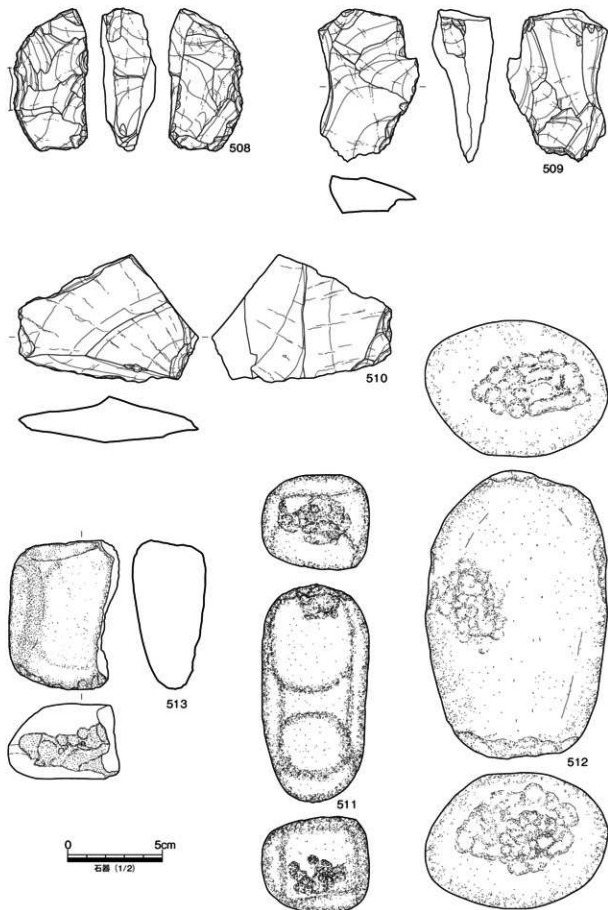


第 79 図 SX II 03 平・断面図、出土遺物実測図 (1)

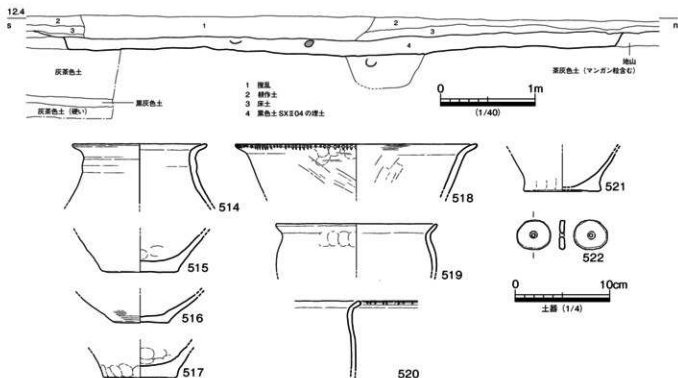


第80図 SX II 03 出土遺物実測図(2)





第 81 図 SX II 03 出土遺物実測図 (3)



第82図 SX II 04 断面図、出土遺物実測図(1)

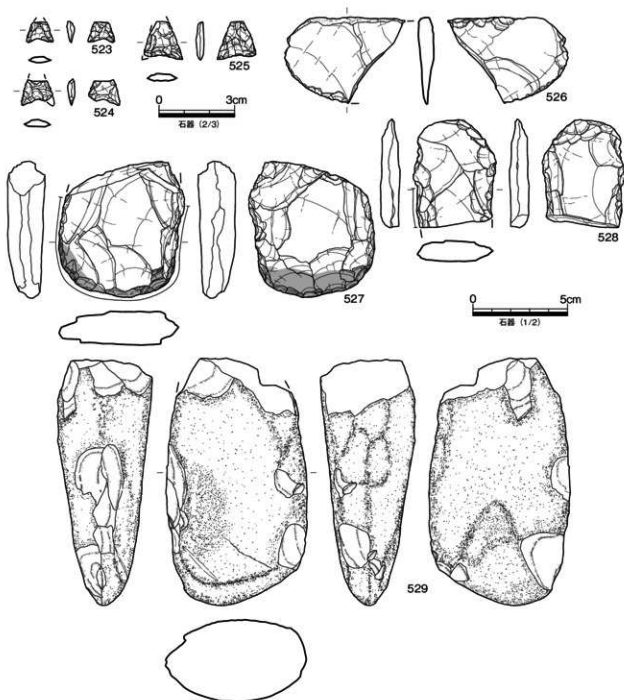
## SX II 04

II区(平成6年度調査区)で検出した落ち込みである。平成6年度調査では方形の掘り込みの可能性を考えて調査しているが、平成7年度調査では包含層として調査している。平成7年度に調査した西側は急速に浅くなり、面的に把握できなかったようである。平成6年度調査では東辺で5.6m、南辺で3m以上の隅丸方形をなす平面形が確認されている。ただし平面形状は整った形態ではない。深さは15cmほどで、断面形は浅い皿状、底部は水平ではなくわずかに凹凸がある。黒色土で埋まっていた。28%コンテナ1箱ほどの遺物と拳大以下の砂岩垂円礫多数とともに破片が散在する状況で出土している。

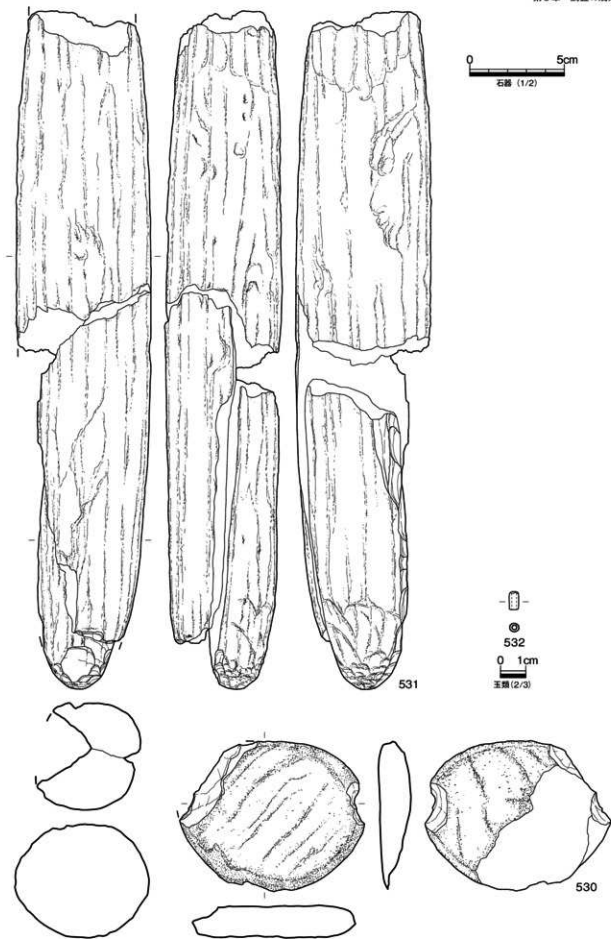
第82～84図514～532はSX II 04出土の遺物実測図である。514の壺は頸部に突帯を削り出している。518は尖り気味の口縁端部に刻み目を施す甕である。522は紡錘車である。526は側縁に矮小な抉りを入れていることから打製石庖丁とする。527、528は打製石斧の破片、529は厚さ4.3cm以上の砂岩製の太型給刃石斧である。530は緑泥片岩製の石錘である。偏平な垂円礫を利用し、両側縁に抉りを入れている。531は緑泥片岩製の石棒である。先端部も一部遺存している。本資料はSX II 04、SR II 02上層およびIV区スタジアム部分の弥生時代の包含層の上面で出土した破片が接合した。IV区スタジアム部分の詳細は不明であるものの、SR II 02上層は弥生時代前期の堆積層であり、弥生時代前期の段階で破片となったものが、最大で70mほど離れて埋没していることがわかる。また、管玉(532)1点が出土している。

第85図533～541は、平成7年度調査区のSX II 04相当層から出土した遺物実測図である。口縁端部に刻み目を施した如意状口縁の甕(533、534)、逆L字状口縁の甕などが出土している。540は刃部に摩滅の見られる打製石斧の刃部、541は石核と考える。

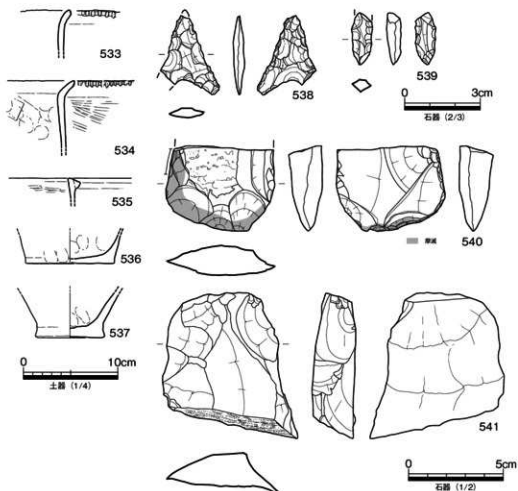
SX II 04も何らかの人為的な掘り込みに、遺物や自然石を廃棄した性格が想定される。



第 83 図 SX II 04 出土遺物実測図 (2)



第84図 SX II 04 出土遺物実測図(3)

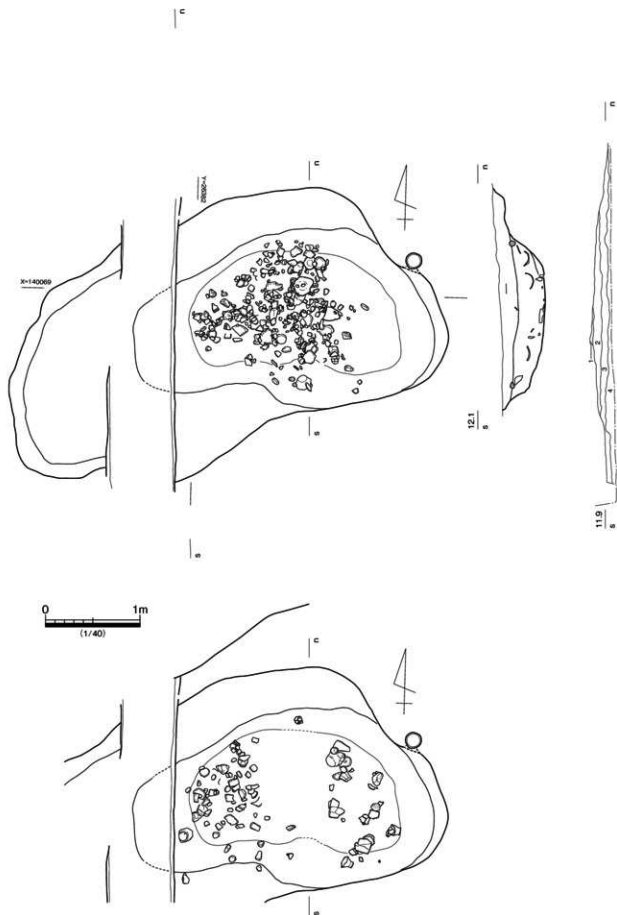


第 85 図 SX II 04 出土遺物実測図 (4)

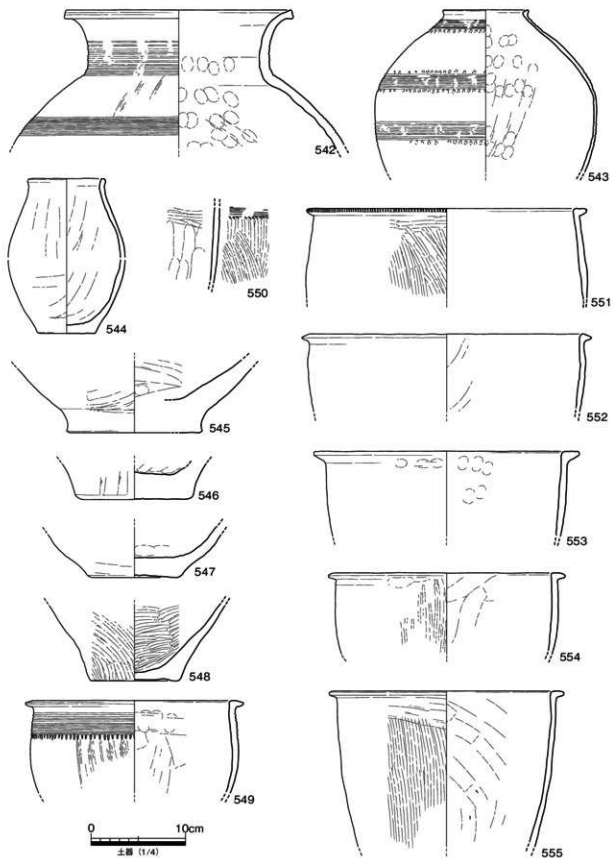
## SX II 05

II 区（平成 7 年度調査区）南半の SR II 02 北側で検出した落ち込み（第 86 図）である。長軸 4.7、短軸 2.3 m ほどのソラ豆のような平面形の落ち込みの東側に、長軸 3.3、短軸 1.9 m ほどの楕円形の落ち込みが重複する。断面は上部が浅い皿状で深さ 40cm ほど、下部が碗状で深さ 53cm を測る。SX II 05 からは土器破片、石器、自然礫が多量に出土した。土器は破片が多く、土器と石器合わせて 28 箱コンテナ 7 箱出土している。

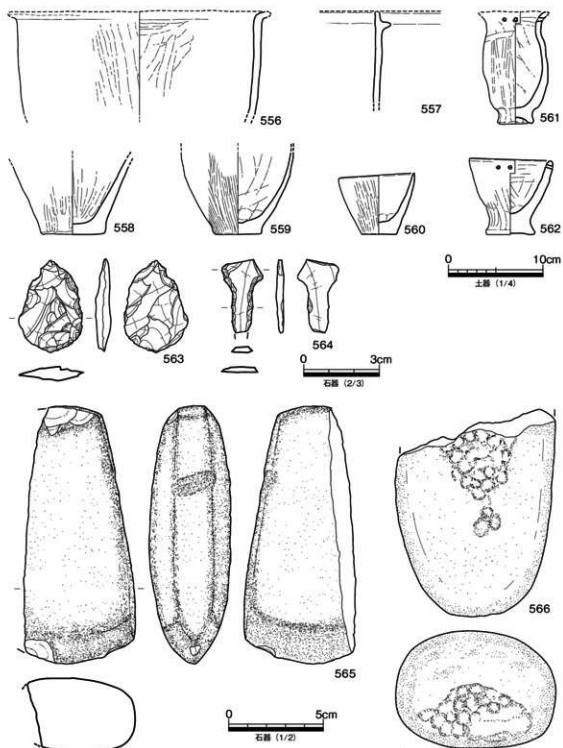
第 87 ～ 89 図 542 ～ 567 は下層出土の遺物実測図である。542 ～ 548 は壺である。542 は広口壺で、胴部から直立気味の頸部、短く外反して端部をわずかに肥厚させている。端部に 1 条、頸部に 11 条、胴部上半に 8 条の多条化したヘラ描き沈線を巡らせている。543 は無頸壺である。球状の胴部からわずかに摘み上げて口縁部をつくる。口縁部下と、胴部最大径付近の上下に櫛描き直線文と刺突列点文からなる文様を巡らせている。544 は胴部中央付近に最大径をもつが、あまり胴は張らない。胴部からわずかに外反する口縁をもつ。549 ～ 559 は甕である。550 は胴部の破片で櫛描き直線文を施す。560 は平底からやや急な角度で外傾する胴部でそのまま口縁に至る鉢、561 は台付小壺とした。上げ底、側面を指押さえし円柱状の底部をつくる。円筒状の胴部からわずかに外反する口縁をもつ。口縁直下に並列



第86図 SX II 05 平・断面図



第 87 図 SX II 05 下層 出土遺物実測図 (1)

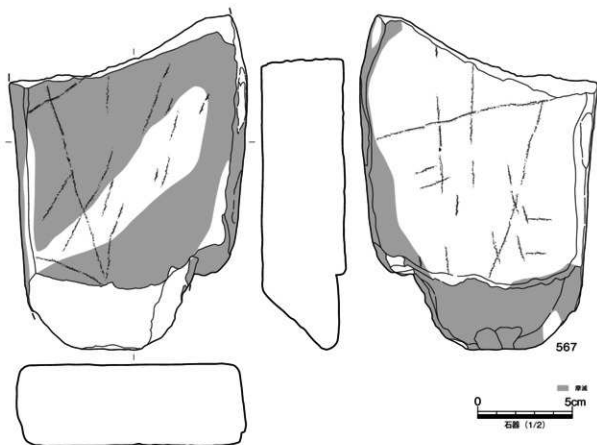


第88図 SX II 05下層 出土遺物実測図(2)

する2個の穿孔がある。562は横方向に突出し肥厚する底部から急角度で外傾する胴部をもち、口縁はそのままおさめる台付鉢である。口縁直下に並列する2個の穿孔がある。563は無茎の凸基式石鏃であるが、先端部の剥離が不十分であるため未成品と考える。565は厚さ3.9cmを測る大型蛤刃石斧である。一側縁は折損する。566は砂岩の敲石、567は砂岩の砥石である。表裏面に砥面がある。

第90、91図568～590は上層出土の遺物実測図である。568～572は壺である。568は頸部の破片



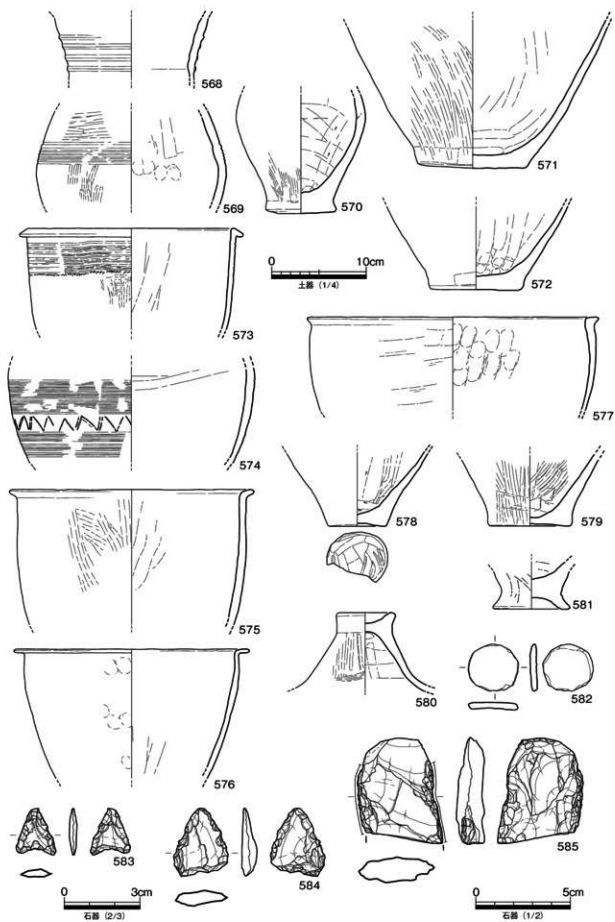


第 89 図 SX II 05 下層 出土遺物実測図 (3)

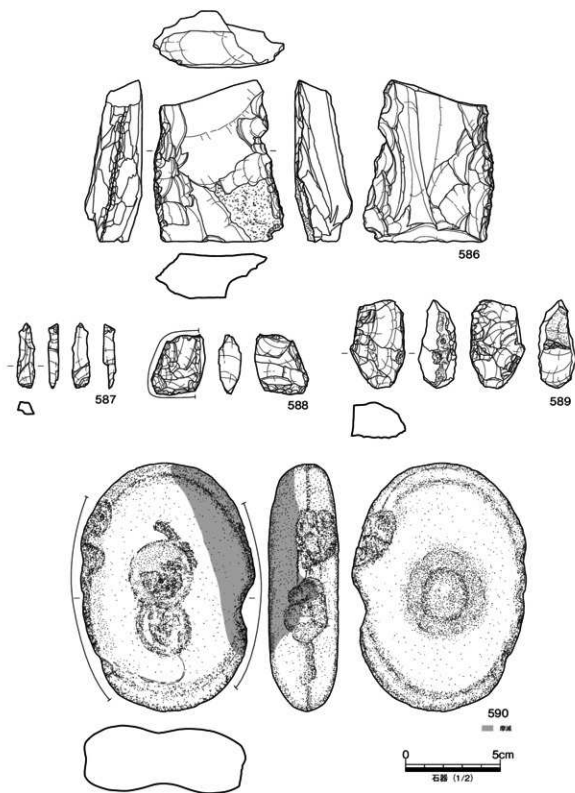
で、貼付け突帯 4 条以上を巡らせている。569 は胴部の破片、最大径より上位に 6 条のヘラ描き沈線を巡らす。573 から 579 は甕である。573 は逆 L 字状口縁で、櫛描き直線文、刺突列点文を巡らせている。574 は胴部の破片、櫛描き直線文と山形文が施されている。580 は蓋形土器、581 は杯部との接合部から「ハ」字形に開き端部を丸くおさめる高杯の脚部である。

584 は一部剥離の不充分な部分があることから未成品と考える。586 も一側縁は丁寧に整形しており、打製石斧未成品と考える。587、588 は楔形石器、589 は貝殻状の割れ口から石英（水晶）を打ち欠いたもので、石核とした。590 は偏平な砂岩亜円礫の凹石である。表裏面に凹みが見られ、側面に凹みや敲打痕が見られる。

SX II 05 出土遺物はやや時期幅があるが、上下層ともに櫛描き直線文をもつ個体があり、また、無頸壺が存在するなど新しい要素が見られる遺構である。真鍋編年の II -1 期に属すると考えられる。

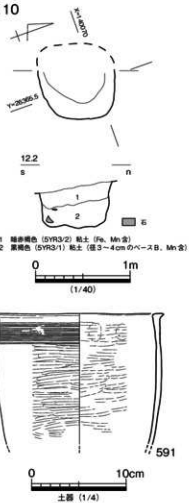


第90図 SX II 05上層 出土遺物実測図(1)

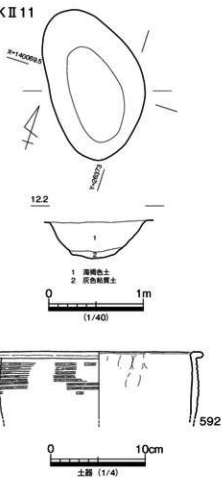


第 91 図 SX II 05 上層 出土遺物実測図 (2)

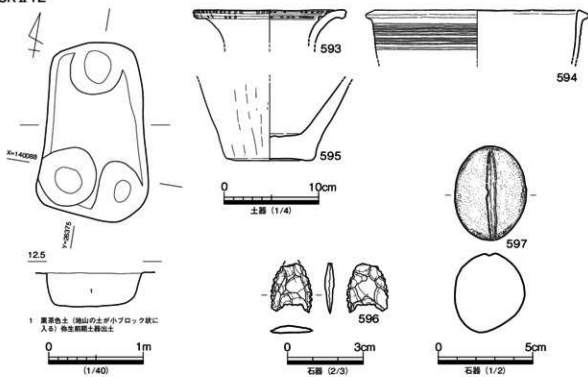
SK II 10



SK II 11



SK II 12



第92図 SK II 10 ~ II 12 平・断面図、出土遺物実測図

## 土坑

### SK II 10

II区（平成7年度調査区）のSD II 04の溝底で検出した土坑である。西側は壊されており東端のみの検出であるが、一辺80cmほどの隅丸方形の平面形と考えられる。断面はU字形で、深さ約50cmである。埋土は2層に分けられ、両層から微量の遺物片が出土している。第92図591は逆L字状口縁の甕である。出土層位は不明である。ほかの出土遺物片の胎土から見ても、SK II 10は弥生時代前期の遺物のみが出土していると判断できる。

### SK II 11

II区（平成6年度調査区）のSX II 02の南側で検出した土坑である。長軸162、短軸102cmのそら豆状の平面形で、断面形は椀状で深さ38cmを測る。図化した土器のほかにも20点あまりの細片が出土しているが、胎土の様子から弥生時代前期の遺構と考えられる。第92図592は逆L字状口縁の甕である。

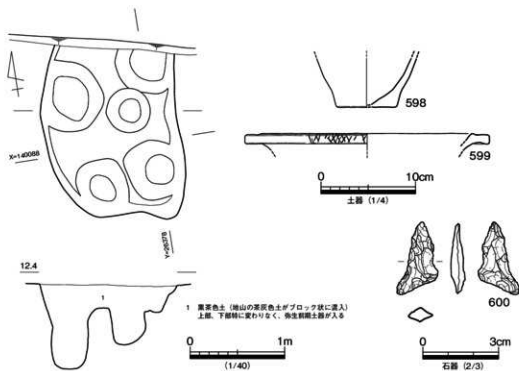
### SK II 12

II区（平成6年度調査区）の北東部で検出した土坑である。長辺185、短辺95～120cmの隅丸台形の平面形で、断面は深い皿状、深さ35cmを測る。さらに底に40～68cmの深さの3基のピットがある。東に隣接するSK II 13、II 15も同様で、複数のピットを一つの土坑が共有する構造の遺構は、弥生時代前期に特徴的に見られるものである。

28%コンテナ1/8箱ほどの遺物片が出土しているが、弥生時代前期の様相を示している。第92図593の甕は口縁端面に刻み目を施したのち、ヘラ描き沈線1条を巡らせている。口縁内面には刻み目のある突帯を巡らせている。このほか弥生時代前期の甕、凹基式石鏝のほか、砂岩円礫を利用した石錘が出土している（597）。全円の1/3程度の長さにも凹みが掘られている。

### SK II 13

II区（平成6年度調査区）で検出した土坑である。長辺170cm以上、短辺145cmの不整形の平面形で、深さ25cmの皿状の断面形である。SK II 13も底から5基のピットを検出している。このうちの1基は調査区北壁に接しているが、写真を見ると土坑を切っているようで、土坑上面でピットの輪郭が見えるはずのものが埋土が類似するために認識できなかった場合もあるようである。ピットの深さは底から44～68cmを測る。28%コンテナ1/8箱ほどの遺物片が出土しており、弥生時代前期～中期初めのものと思われる。第93図599は高杯の口縁部の破片である。羽釜のような形態で口縁端部にヘラ描きの斜格子文を刻んでいる。真鍋編年のⅢ-1期まで下る可能性がある資料である。

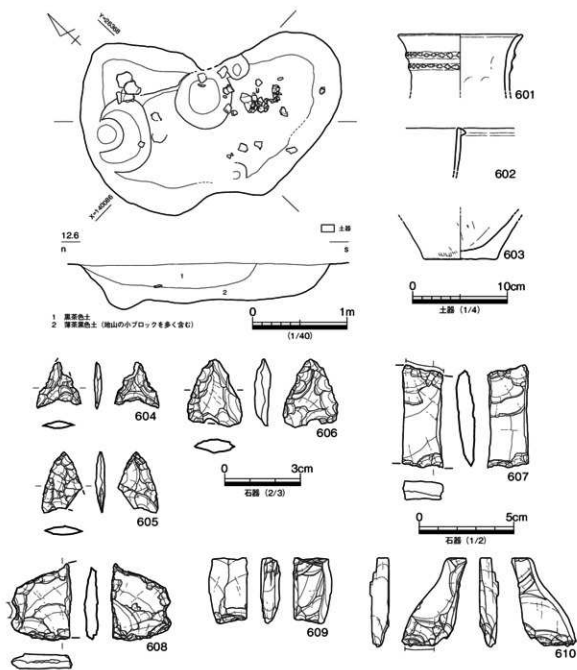


第93図 SK II 13 平・断面図、出土遺物実測図

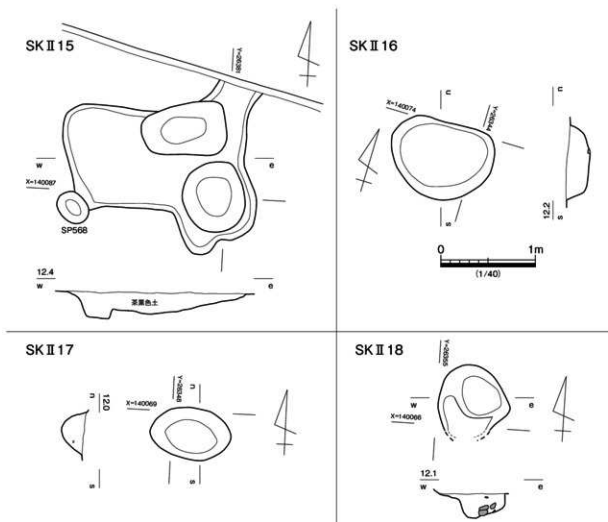
## SK II 14

Ⅱ区(平成6年度調査区)で検出した土坑である。長軸280、短軸135cmほどのそら豆状の不整形な平面形で、深さ38cmほどの皿状の断面形である。底に深さ23、18cmのビットが存在する。28 $\frac{1}{2}$ リットルコンテナ1/4箱ほどの遺物が出土している。図化遺物の様相と合わせて弥生時代前期の遺構である。第94図601～610はSK II 14出土の遺物実測図で、刻み目のある突帯2条を貼り付ける長頸壺、甕、石鏃、削器、打製石庵丁、剥片化した楔形石器が出土している。

このほか、SK II 15は10片あまりの土器細片が出土したのみであるが、土坑の底に複数のビットをもつ構造から弥生時代前期の遺構と考える。また、SK II 16、SK II 17、SK II 18は図化不能の土器細片が微量出土したのみであるが、胎土の様子が弥生時代前期のものに限定され、前期の遺構と判断する(第95図)。

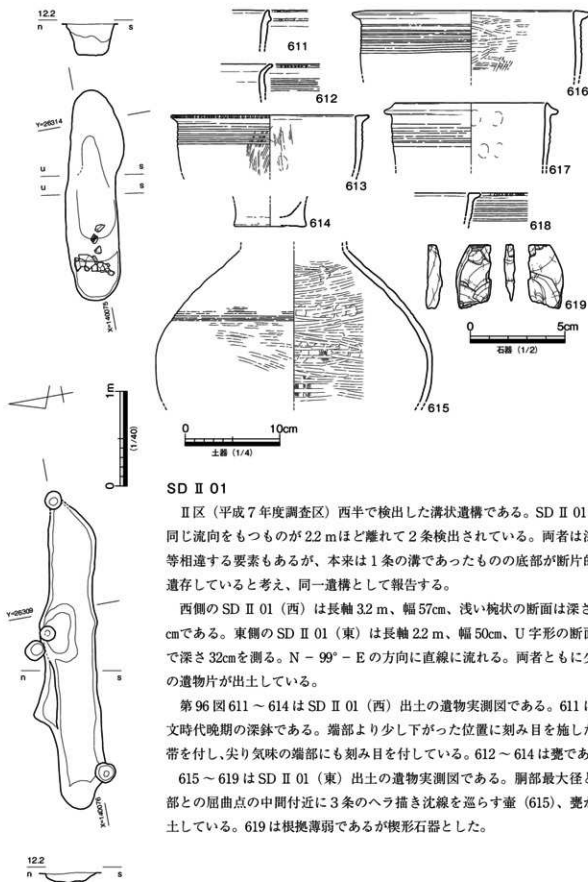


第 94 図 SK II 14 平・断面図、出土遺物実測図



第95図 SK II 15～II 18 平・断面図





SD II 01

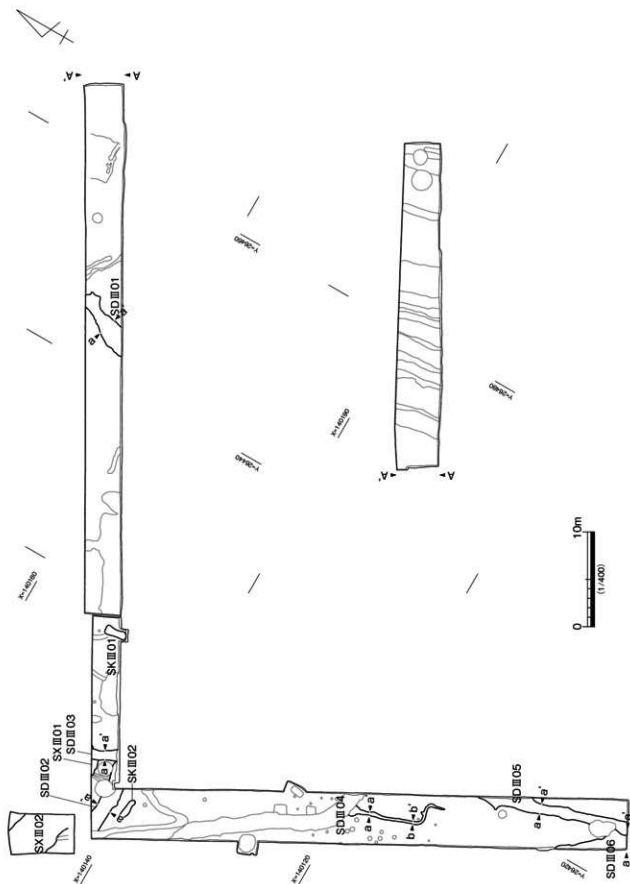
Ⅱ区（平成7年度調査区）西半で検出した溝状遺構である。SD II 01は、同じ流向をもつものが2.2mほど離れて2条検出されている。両者は深さ等相違する要素もあるが、本来は1条の溝であったものの底部が断片的に遺存していると考え、同一遺構として報告する。

西側のSD II 01（西）は長軸3.2m、幅57cm、浅い椀状の断面は深さ10cmである。東側のSD II 01（東）は長軸2.2m、幅50cm、U字形の断面形で深さ32cmを測る。N-99°-Eの方向に直線に流れる。両者ともに少量の遺物片が出土している。

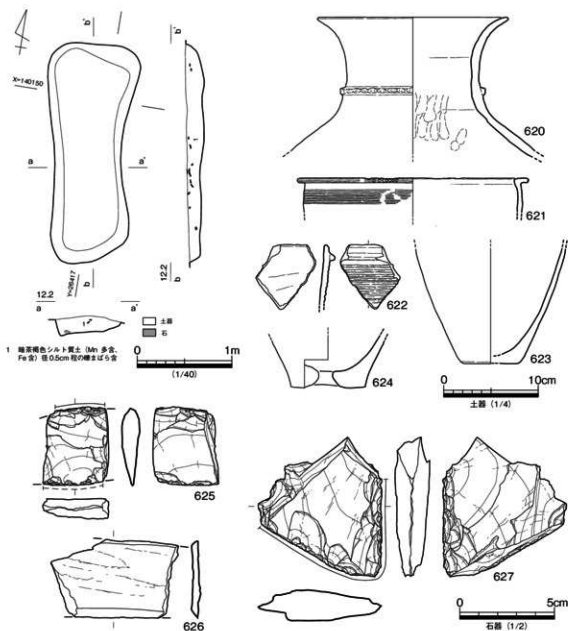
第96図611～614はSD II 01（西）出土の遺物実測図である。611は縄文時代晩期の深鉢である。端部より少し下がった位置に刻み目を施した突帯を付し、尖り気味の端部にも刻み目を付している。612～614は甕である。

615～619はSD II 01（東）出土の遺物実測図である。胴部最大径と頸部との屈曲点の中間付近に3条のヘラ描き沈線を巡らす壺（615）、甕が出土している。619は根拠薄弱であるが楔形石器とした。

第96図 SD II 01 平・断面図、出土遺物実測図



第97図 III区弥生時代前期遺構 平面図



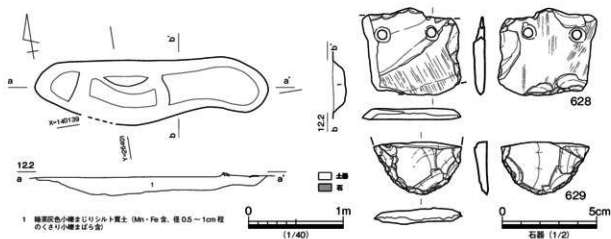
第 98 図 SK III 01 平・断面図、出土遺物実測図

### Ⅲ区（第 97 図）

Ⅲ区で検出した弥生時代前期～中期前葉の遺構（SK III 01、Ⅲ 02、SX III 01、SD III 01～Ⅲ 06）について報告する。なお、SX III 02 は調査対象地外の工事中に見えられた遺構である。土坑

#### SK III 01

Ⅲ区で検出した土坑である。長さ 2.3、短辺 0.7、深さ 0.2 m で、平面形は長辺中央がやや内側にすばまる隅丸長方形、断面形は長短辺とも一端は箱形を呈するが、一端は緩やかに立ち上がる形状である。28% コンテナ 1/8 箱ほどの遺物破片が散在して出土している。第 98 図 620 は頸部の中央部付近に「O」字形の押捺突帯文を貼り付けた壺である。621、622 は甕、623、624 は焼成後に穿孔した甌である。625 は上辺に刃潰れ、下辺はわずかに摩滅が見られることから削器とした。626 は緑泥片岩製の石器片であ

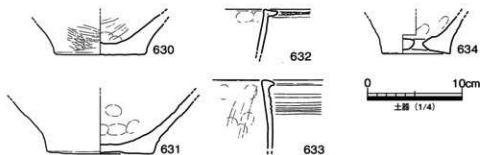


第99図 SK III 02 平・断面図、出土物実測図

る。下辺に刃部を作り出していることから磨製石庖丁の残欠と考える。627は器種不明、2次加工のある剥片とした。SK III 01は図化遺物、未図化遺物の様相から弥生時代前期の遺構である。

## SK III 02

Ⅲ区で検出した土坑である。長軸2.5、短軸0.6mほどの不整形な長楕円形を呈する。断面形状は深さ18cmで浅い椀状を呈する。弥生土器片が少量出土しているが、時期の特定は難しい。SD III 02と平行する位置関係にあることから弥生時代前期の遺構と考える。緑泥岩製の磨製石庖丁の残欠（第99図628）、打製石斧の刃部の破片（第99図629）が出土している。



第100図 SX III 01 出土物実測図

## その他の遺構

## SX III 01

Ⅲ区で検出したもので、大半が調査区外に延びることから性格不明の遺構である。検出部分の平面形は円弧状を呈する。深さ24cmを測る。他の遺構との関係で断面の立ち上がり形状は不明であるが、底は平坦である。28 $\frac{1}{2}$ リコンテナ1/8箱ほどの遺物片が散在する状況で出土している。弥生時代前期の遺構と考えられる。

第100図630～634はSX III 01出土の遺物実測図である。弥生時代前期の壺の底部、甕の口縁部、甌の破片が出土している。

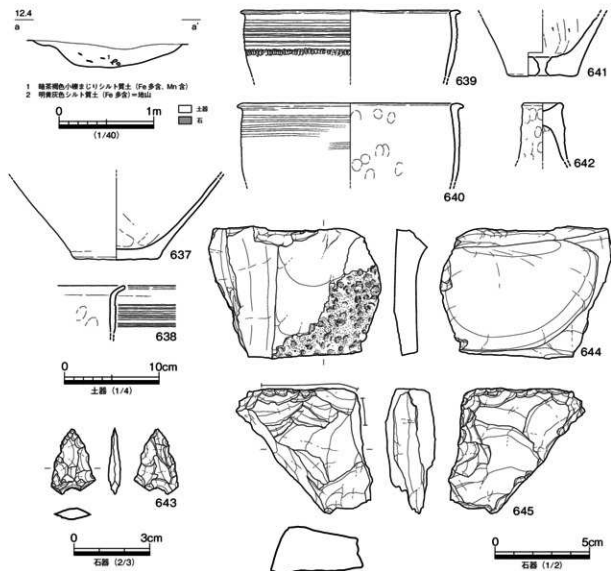


第 101 図 SD III 01 断面図、出土遺物実測図

溝状遺構

SD III 01

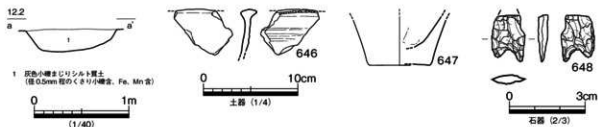
皿区で検出した溝状遺構である。N - 24° - E 方向に直線状に流れる。検出長は 5.3 m、幅 200、深さ 26cm を測る。断面形は浅い皿状を呈する。少量の遺物が出土している。2 点を図化した。第 101 図 635 の壺は頸胴部の境に 2 条の貼付け突帯を付したもの、636 は「O」字形の指頭圧痕文を施した貼付け突帯 3 条、その上部に 1 条のヘラ描き沈線を巡らした壺体部の破片である。



第 102 図 SD III 02 断面図、出土遺物実測図

## SD III 02

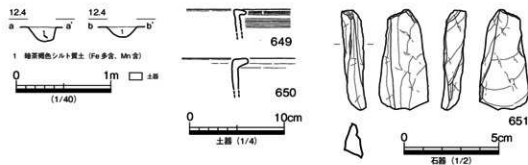
Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N - 88° - W 方向に直線状に流れるもので、幅 160、深さ 24cm ほどの規模である。断面形は浅い椀状を呈する。検出長は約 5 m で、28% コンテナ 1 箱分の遺物が出土している。土器は弥生時代前期の壺、甕、甌、蓋が、石器は石鏃、石核が出土している。第 102 図 644、645 は石核とした。



第 103 図 SD III 03 断面図、出土遺物実測図

## SD III 03

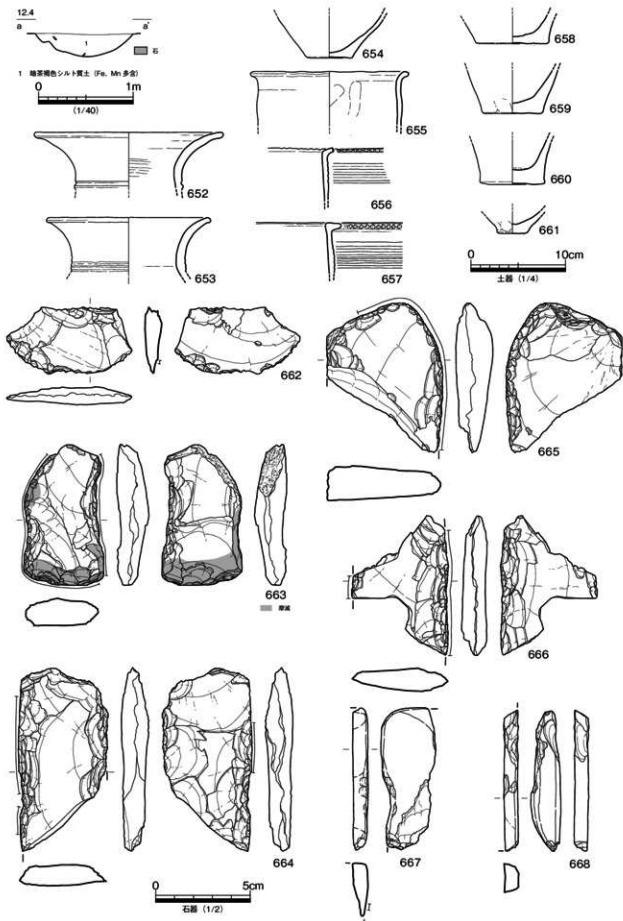
Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N - 25° - W の方向に直線状に流れ、検出長約 2.8 m、幅 100、深さ 25cm ほどの規模で断面形は椀状を呈する。SD III 02、SX III 01 より新しい。少量の遺物が出土している。須恵器片が 1 点含まれるが混入と考えられ、以外は弥生時代前期とみられる。第 103 図 646 は内面にも突出部をもつ断面 T 字形を呈する逆 L 字状口縁の甕である。



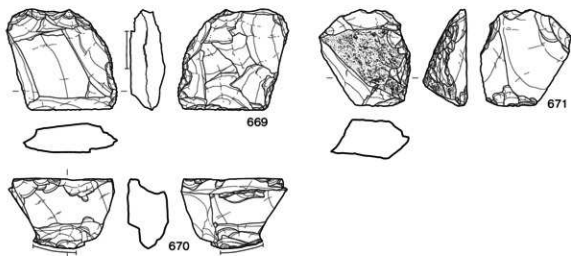
第 104 図 SD III 04 断面図、出土遺物実測図

## SD III 04

Ⅲ区で検出した溝状遺構である。途中クランク状に折れ曲がるが、全体として N - 18° - W 方向に流れる。北側は SD III 08 に壊される。検出長は約 11.3 m で、規模は幅 30、深さ 15cm、断面形は椀状である。少量の遺物が出土しているが弥生時代前期とみられる。第 104 図 651 は剥片化した楔形石器と考えるが、SD III 08 出土のものと遺構間で接合した。



第 105 図 SD III 05 断面図、出土遺物実測図 (1)



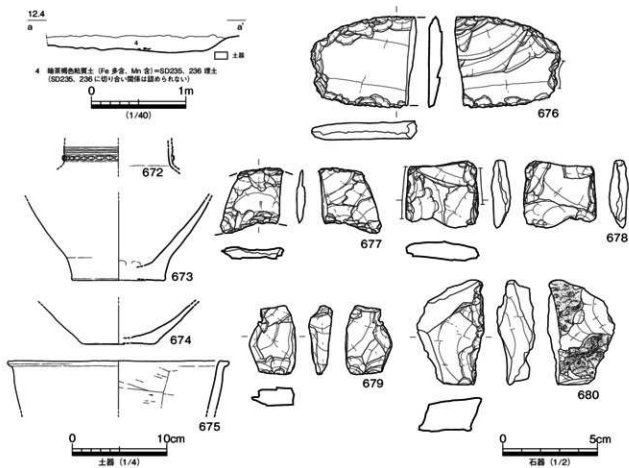
第106図 SD III 05 出土遺物実測図(2)

## SD III 05

Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N - 17.5° - W方向に直線状に流れる。南でSD III 06と接するが明瞭な前後関係は認められない。検出長は約13.5m、規模は幅100、深さ20cmで、断面形は碗状である。28㊦コンテナ1箱の遺物が出土しているが、弥生時代前期と考えられる破片が大半を占める。

第105、106図652～671はSD III 05出土の遺物実測図である。弥生時代前期の広口壺、如意状や逆L字状口縁の甕が出土している。661は摩滅のため詳細不明であるが、弥生時代後期の鉢の可能性が混入か。663は基部から側縁に礫面が残ることから完形に近い形状の打製石斧である。664の一側縁は一定の厚みのある割れ面の大半をそのまま利用し、一部を敲打によって整形した打製石斧である。666は両側縁に押圧剥離、刃潰しが見られることから基部、刃部を折損した打製石斧と考える。667は緑泥岩製の柱状片刃石斧片、668も緑泥片岩製の偏平片刃石斧片である。669は下辺の割れ面の縁に微細な階段状剥離、上辺には割れ面と打撃に伴う階段状剥離が見られることから楔形石器と考える。なお、整形の様子から打製石斧を転用したものと思われる。671は石核とした。

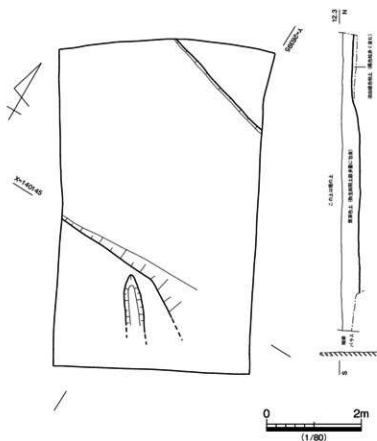




第 107 図 SD III 06 断面図、出土遺物実測図

### SD III 06

Ⅲ区南端で検出した溝状遺構である。なお、位置関係から SR II 02 河岸部である可能性も考えられる。少量の出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。図化した土器はいずれも摩滅する小片である。第 107 図 677 は形状から石鎌と考えている。680 は石核とした。

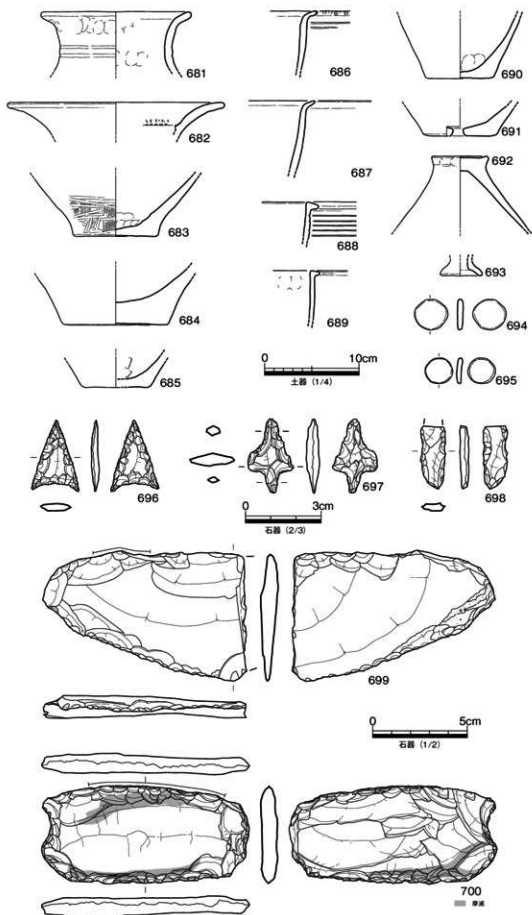


第108図 SX III 02 平・断面図

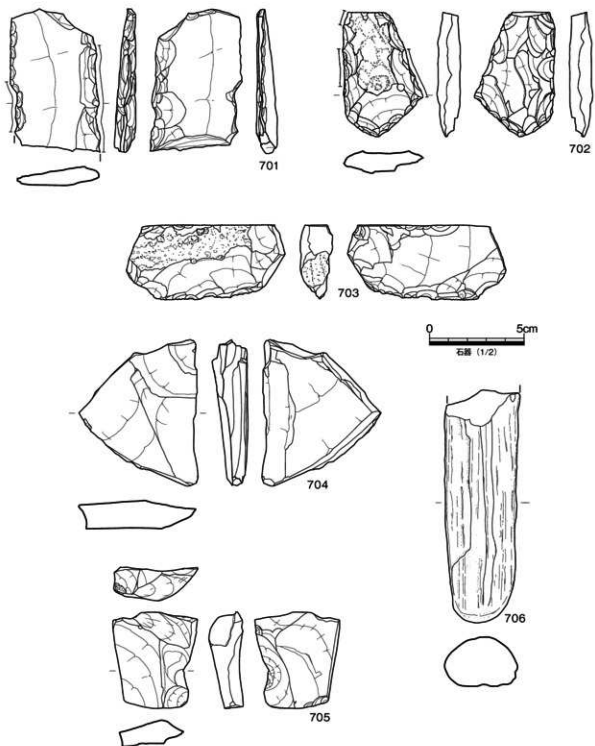
## その他の遺構

## SX III 02

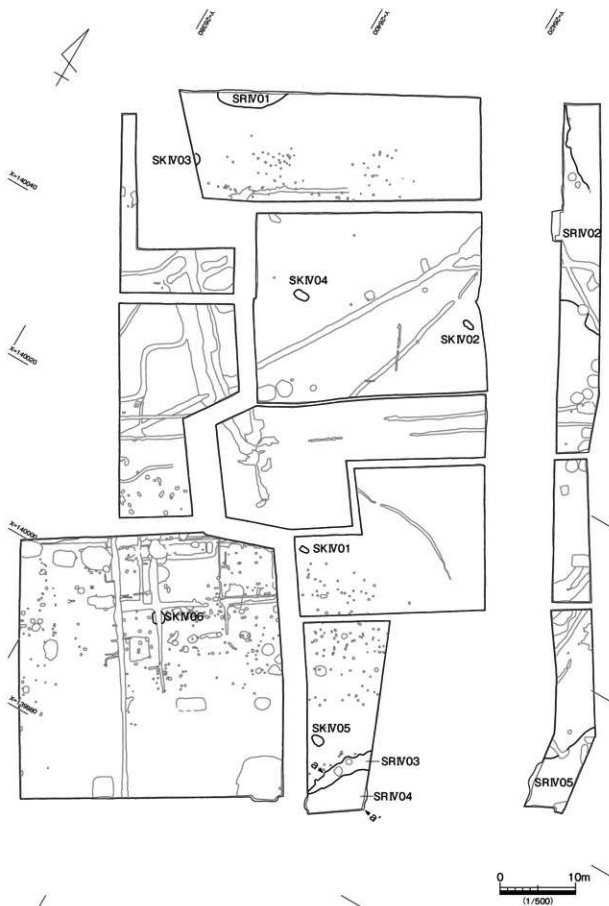
Ⅲ区の南北方向の調査区の北側延長と平池南岸堤防の交点で行われた取水口工事の際に遺構が検出されている。工事範囲は南北6.8、東西4.2mの長方形で、幅約4m、深さ40cmの黒茶色土で埋まる凹地（第108図）である。弥生時代前期の土器片、石器が散在する状態で包含されていた。第109、110図681～706はSX III 02出土の遺物実測図である。広口壺、如意状や逆L字状口縁の甕、蓋などが出土している。682の壺は口縁部内面に貼り付け突帯を付し、その上部を2列の竹管による列点文で飾る。693は小型の高杯形土器の脚部と思われる。694、695は円盤状土製品である。697は凸基有茎式の石鏃、700は完形の打製石庖丁、702は側縁に刃潰しが見られることから打製石斧片とした。703は楔形石器、704、705は石核、706は緑泥片岩製の石棒の残欠である。



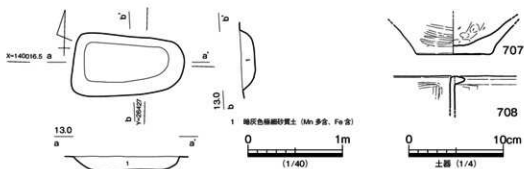
第109図 SX III 02 出土遺物実測図(1)



第110図 SXⅢ 02 出土遺物実測図(2)



第 111 図 IV区弥生時代前期遺構 平面図



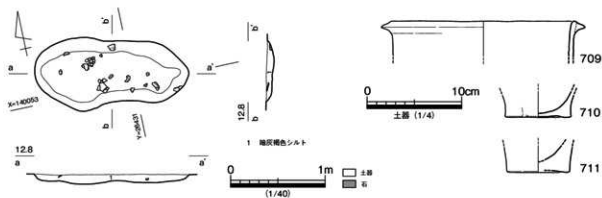
第112図 SK IV 01 平・断面図、出土遺物実測図

## IV区

## 土坑

## SK IV 01

IV区スタジアム部分で検出した土坑である。長軸118、短軸64cm、東側は楕円状、西側は隅丸方形の不整な平面形で、断面形は皿状で深さ14cmを測る。第112図の弥生時代前期の壺底部(707)と甕(708)の図化遺物のほかに数点の土器片が出土している。未図化遺物では時期の特定はできないが、埋土の状況もくわえて弥生時代前期の遺構と判断する。



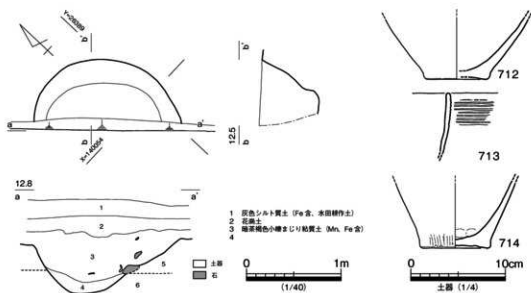
第113図 SK IV 02 平・断面図、出土遺物実測図

## SK IV 02

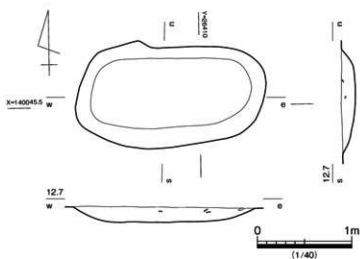
IV区スタジアム部分で検出した土坑である。長軸162、短軸65cmほどの長軸中央部が少し凹むそばら豆状の平面形である。深さ10cmで浅い皿状を呈する。第113図の弥生時代前期の甕(709～711)のほかに25点ほどの弥生土器細片が出土している。細片の大多数は砂粒を多く含むもので、SK IV 02は弥生時代前期の遺構と判断する。

## SK IV 03

IV区スタジアム部分で検出した土坑である。東端のみ検出し、西側は調査区外である。検出部分は径1.6mほどの円弧状の平面形で、深さ0.6mほどのU字形の断面形である。第114図の弥生時代前期の壺底部(712)、口縁端部を欠損した甕(713)、甕底部(714)のほかに20点あまりの土器細片および砂岩円礫が出土している。未図化遺物の様相もあわせてSK IV 03は弥生時代前期の遺構と判断する。



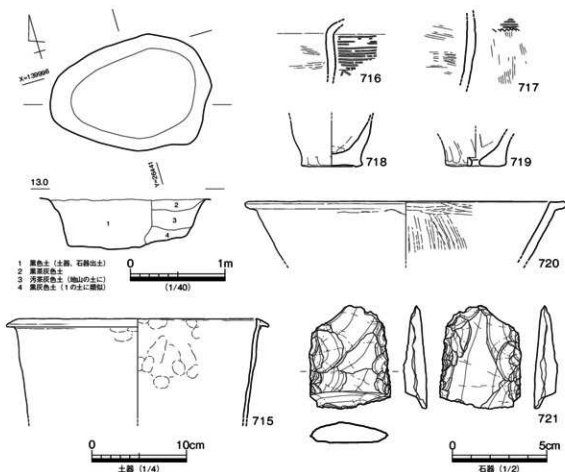
第 114 図 SK IV 03 平・断面図、出土遺物実測図



第 115 図 SK IV 04 平・断面図

#### SK IV 04

IV区スタジアム部分で検出したSK IV 04（第115図）は、長軸200、短軸108cmで短辺は円弧状、長辺は直線状の長円形の平面形で、深さ16cmほどの浅い椀形の断面形の土坑である。20点ほどの土器細



第116図 SK IV 05 平・断面図、出土遺物実測図

片が出土し、図化可能な遺物はないが、弥生時代前期の遺構と判断する。

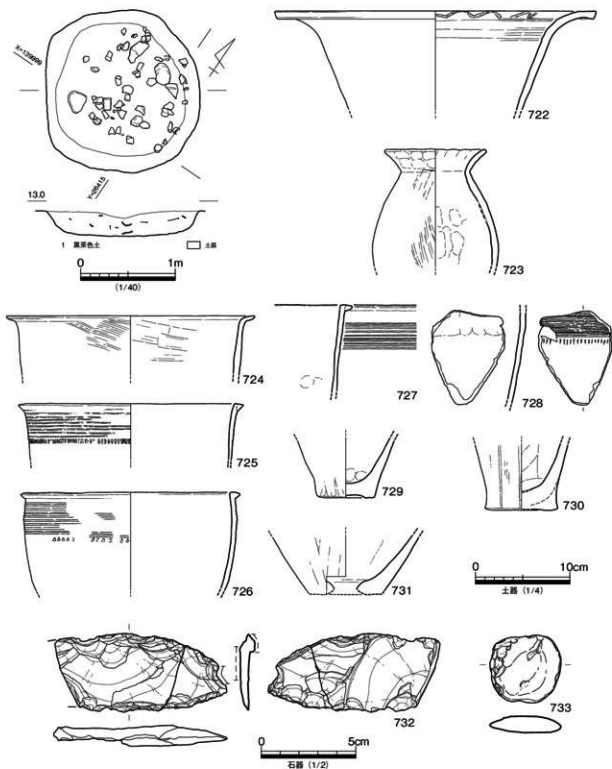
#### SK IV 05

IV区スタジアム部分で検出した土坑である。長軸 172、短軸 118cmの不整な楕円形で、深さ 50cmの箱形の断面形をもつ。断面図では一度埋没したあとに再掘削されていることが分かる。第116図の弥生時代前期の甕 (715～718)、甌 (719)、鉢 (高杯とすべきかもしれない) (720)、打製石斧 (721) が出土しているほかに 70 片あまりの土器細片が散在する状況で出土している。弥生時代前期の遺構である。

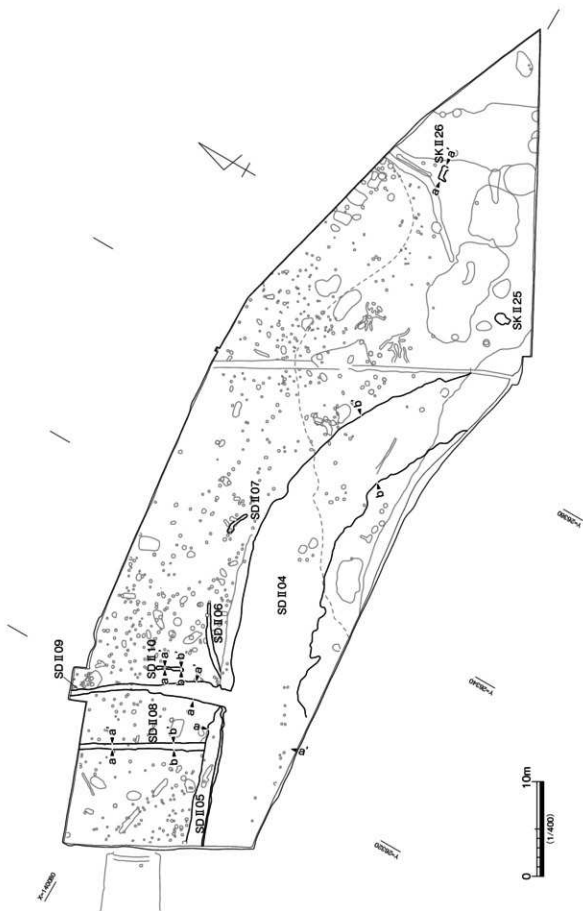
#### SK IV 06

IV区スタジアム部分で検出した土坑である。直径 160～170cmの円形で、深さ 24cm、皿状の断面形である。埋土中に 28 $\frac{1}{2}$  コンテナ 1/4 箱分の遺物と砂岩亜円礫数点が散在する状況で出土している。第117図 722～733はSK IV 06出土の遺物実測図である。722は外上方に延びる頸部から緩やかに湾曲する口縁をもつ壺で、口縁部内面にヘラ描きの山形文、3条の突帯を付している。723は胴部中位付近に最大径をもち、縦方向の算盤玉状の胴部から短く開く口縁をもつ壺である。724～730は甕、731は甌、732は打製石庖丁、733は円盤状石製品である。未図化遺物も弥生時代前期と考えられるもので占められる。





第 117 図 SK IV 06 平・断面図、出土遺物実測図



第118図 II区弥生時代後期遺構 平面図

### 3 弥生時代中期後半～後期

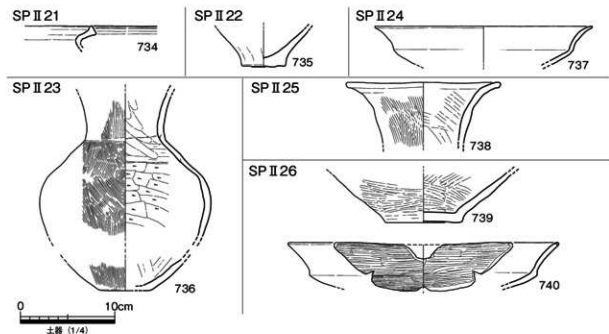
#### Ⅱ区

#### 柱穴

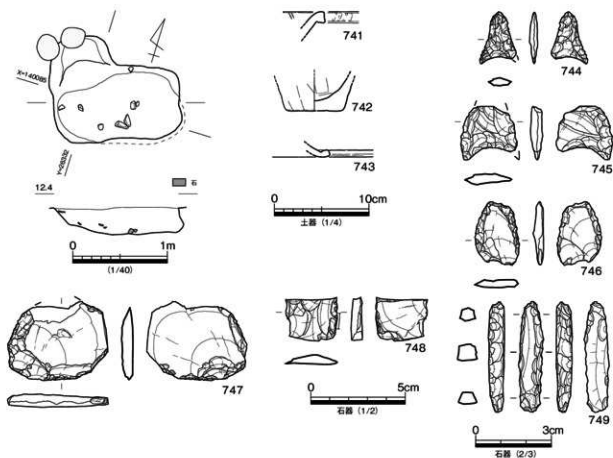
#### SPⅡ 21～Ⅱ 26

第119図734～737はⅡ区（平成7年度調査）で検出したピットから出土した弥生時代中～後期の遺物実測図である。734はSPⅡ 21出土の甕である。「く」字形に屈曲し端部を上につき上げ、端面に擬凹線を施す。735はSPⅡ 22出土の甕底部である。SPⅡ 23では壺が少し斜めに傾いて据えられた状態で出土している。平底で肩の張る胴部から外傾して立ち上がる頸部をもつ。737は大きく外反する口縁の高杯である。

738～740はⅡ区（平成6年度調査）で検出したピットから出土した弥生時代後期の遺物実測図である。738はSPⅡ 25から出土したもので、長頸壺の口縁部である。739、740はSPⅡ 26から出土したもので、739は前期の壺底部と思われる。740は外反する口縁をもつ高杯である。なお、SPⅡ 26は明瞭なピットではなく、SRⅡ 02付近で検出された不整形な落ち込み状の遺構である。



第119図 SPⅡ 21～Ⅱ 26 出土遺物実測図

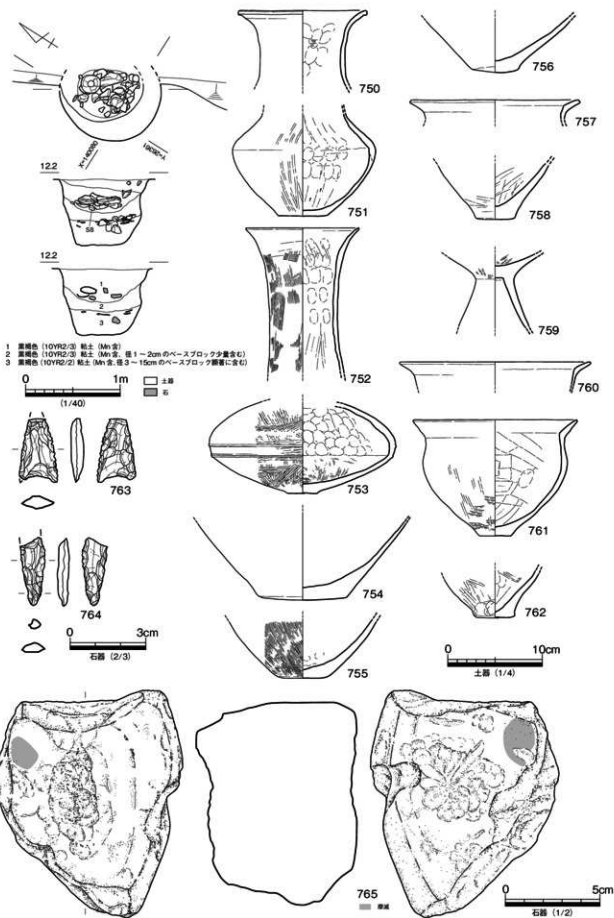


第120図 SK II 19 平・断面図、出土遺物実測図

## 土坑

## SK II 19

Ⅱ区（平成7年度調査区）で検出した土坑である。長辺130、短辺77cmの隅丸長方形の西北に幅70、長さ30cmほどの突出部を付す形状である。深さ28cm、西側は緩やかに立ち上がるが、東側は挟り込む断面形である。微量の弥生土器片が出土している。第120図741は壺の口縁としたが器台とすべきかもしれない。摩滅が著しいが口縁端面に刻みが施されるようである。742は弥生時代前期の甕、743は高杯の脚端部と考えられる小片である。744、745は石鎌、746は石鎌未成品と考える。747はわずかに摩滅が見られることから削器とした。また、748は小片のため器種はよくわからない。749は小型で棒状の角錐状石器である。サヌカイト製の横長剥片を素材とし、素材剥片の周縁から整形加工を加え、棒



第 121 図 SK II 20 平・断面図、出土物実測図

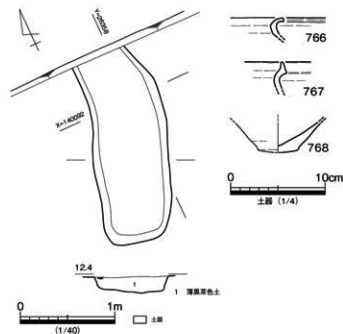
状の形状に仕上げている。

### SK II 20

II区で検出した土坑である。平成6年度と7年度の調査区境に位置し、西側5分の3ほどが遺存する7年度調査区で調査記録が残っている。SK II 20は直径約1mの円形で、断面形は筒形をなし、深さ約70cmの規模である。大きく3層に分層され、下層の上部、上層の下部に遺物および自然礫が集中している。第121図750～765はSK II 20出土の遺物実測図である。765が下層出土、754の破片の一部が下層出土である以外はすべて上層出土である。このほかの上層出土の遺物は、図化遺物以外は破片が少量、下層出土の遺物は摩滅する破片が少量あるのみである。

750～753は壺である。752は筒状の頸部からラッパ状に開く口縁を有する長頸壺である。753は長頸壺の胴部で、算盤玉形の胴部最大径付近に2条の突帯を付している。754は弥生時代前期の壺の底部、755、756は丸底化の進んだ壺の底部である。このほかに甕の口縁部(757)と底部(758)、高杯(759)、鉢(760～762)が出土している。765は下層出土の凹石である。砂岩五角礫を打ち欠いて犬頭大の台石としたもので、両面に凹みが見られる。

SK II 20出土遺物は、一部前代の混入と考えられるものがある以外は真鍋編年V-4期に収まるものと考えられる。上層の遺物は出土状況図や写真に示すとおり掘え置きや投棄(出土状況からは後者の可能性を考える)といった人為によることが明白で、年代を確実に示す遺構である一方、弥生時代前期の遺構の埋土とよく似ており、埋土では前期か後期かを分離できないことがわかる。なお、SK II 20は湧水層までは掘削していないため井戸としての機能は考えにくい。



第122図 SK II 21 平・断面図、出土遺物実測図

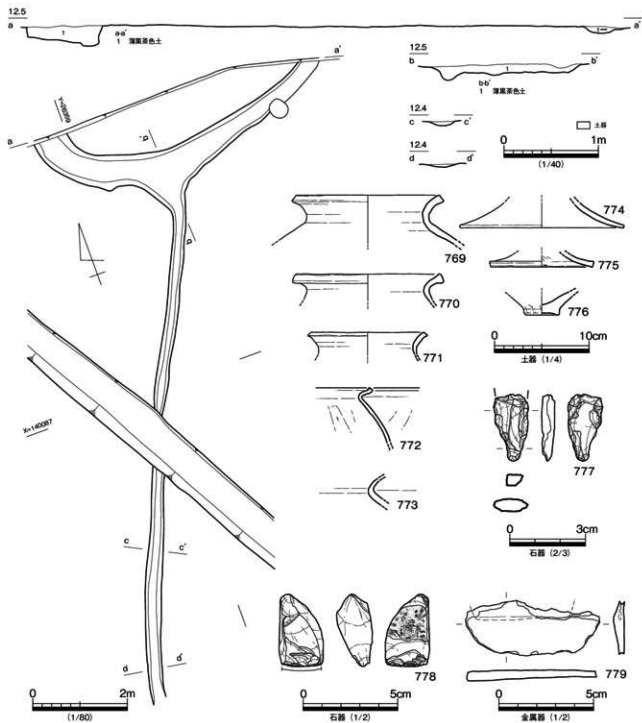
### SK II 21

II区(平成6年度調査)で検出した土坑と考えられる遺構である。長辺2m以上、幅80cmのわずかに湾曲する隅丸長方形で、北側は調査区外に延びる。断面形は皿形で深さ18cmを測る。後述のSD II 02に隣接するが前後関係があるかどうかは不明である。28 $\frac{1}{2}$ コンテナ5分の1ほどの遺物片が出土している。いずれも小片で、弥生時代後期のものを主体とする。

溝状遺構

SD II 02

Ⅱ区で検出した溝状遺構である。平成6、7年度調査区の境界付近を座標北から東へ24°振った方向で直線状に流れ、北側で円弧状に流れる溝状遺構と接続する。検出範囲における平面形は「刺又」状を呈する。円弧状の溝状遺構は調査区外に延びる。直線部分は幅18～22、深さ4cmほどの規模で、断面形は椀状、検出長約7mである。南側は中世のSD II 04付近で消滅する。円弧状部分は、幅40、深さ



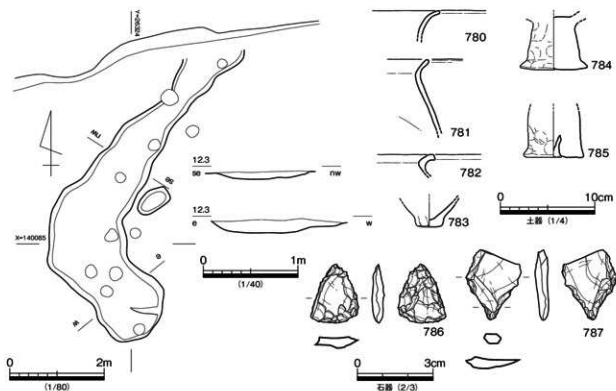
第 123 図 SD II 02 平・断面図、出土遺物実測図

10～16cmほどの規模で、断面形は皿形を呈する。SD II 02 からは微量の弥生土器片と青銅製鋤先が出土している。

第123図769～779はSD II 02 出土遺物の実測図である。769～773は甕である。「く」字形に屈曲する短い口縁で、端部はそのままおさめるものとわずかに肥厚させるものがある。774、775は高杯の脚端部、776は鉢、777は石錐、778は剥片化した楔形石器とした。下辺にわずかに摩滅が見られることから転用品の可能性がある。

779は青銅製鋤先と考えられる破片である。出土状況は埋土中から出土した以外の詳細はわからない。先端部の破片と見られ、現状では隅丸形の直線刃で現存幅は6.9cmである。柄を装着するための「袋」(ソケット)に分岐する部分がわずかに遺存している。青銅製鋤先に見られることのある「袋」基部の突帯の有無は不明である。

遺物は破片が散在する状況で出土しており小片が多い。土器は弥生時代後期に限定され、真鍋編年V 4期に属するものと見られる。



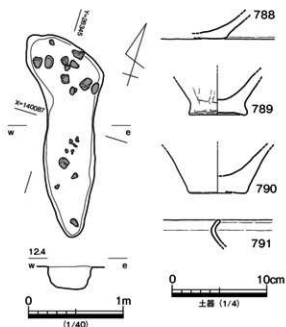
第124図 SX II 06 平・断面図、出土遺物実測図

### その他の遺構

#### SX II 06

II区(平成7年度調査)で検出した落ち込みである。座標北から約35°東に振った方向の落ち込みが円弧状に南東方向に曲がる平面形をとるが、輪郭は凹凸があり、人為による掘り込みがどうか疑わしい。北側は調査区外に延びる。幅50～160、深さ12cmほどの規模で、断面形は浅い碗状を呈する。28 $\frac{1}{2}$ リコンテナ1/4箱ほどの遺物片が出土している。小片が主体で、弥生時代前期のものと後期のものが混在している。第124図780～782は甕の小片、783は鉢、784、785は支脚である。786は一側縁が未調整



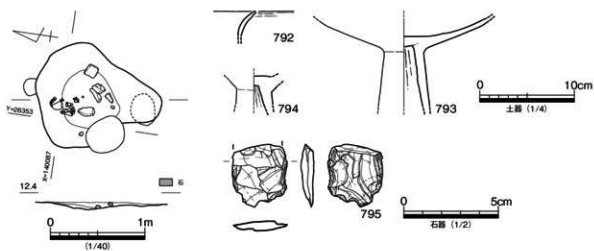


第 125 図 SX II 07 平・断面図、出土遺物実測図

のため石鏃の未成品と考える。

### SX II 07

Ⅱ区（平成7年度調査）で検出した落ち込みである。平面形は長軸 2.2、短軸 0.5m ほどの規模の不整形、断面は U 字形で 22cm の深さを測る。微量の弥生時代前期、後期の土器片が出土している。第 125 図 788 は壺底部、789、790 は壺底部で、789 は円盤状でわずかに上げ底となる。791 はかろうじて形態のわかる摩滅する小破片で、弥生時代後期の甕口縁部である。



第 126 図 SX II 08 平・断面図、出土遺物実測図

### SX II 08

Ⅱ区（平成7年度調査区）で検出した落ち込みである。底場は 1m ほどの直径の円形を呈するが、上場は不整形、断面も深さ 12cm、掘り込みの不明瞭な断面形で、自然形成か遺構か判然としない。小破片となって摩滅した遺物片が微量出土している。第 126 図 792 は甕の口縁部と考えられる。793、794 は高杯、795 は小片のため器種はわからない。

### このほかのⅡ区の弥生時代後期の遺構

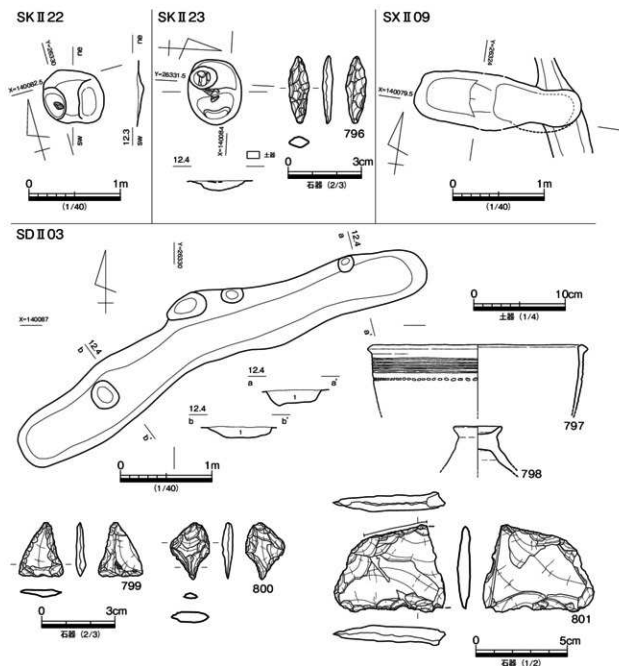
以下の遺構（第 127 図）は弥生時代後期に属すると考えられるものである。

SK II 22は、長径130、短径110cmのやや不整な円形で深さ6cmの土坑である。きわめて微量の土器小片が出土しているが、弥生時代後期の甕の破片を複数含んでいる。

SK II 23は、長径142、短径118cmの円形で、深さ10cmの土坑である。数点の弥生土器小片が出土しているが、1点は弥生時代後期の甕の口縁部と見られる。

SD II 03は、長さ4.8、幅0.6mほどの規模の、北側にやや凸の平面形の溝状遺構である。深さは13cmほどで、断面形は不整形な皿形である。少量の遺物が出土し、図化遺物は弥生時代前期のものであるが、未図化遺物に後期と考えられる小片が含まれる。

SX II 09は、検出長1.3、幅0.6m（東側は後代の遺構に壊される）、西側に深さ10cmの段があり中央部で33cmの深さとなる。微量の土器片が出土しているが、弥生時代後期に属すると考えられるものを含む。

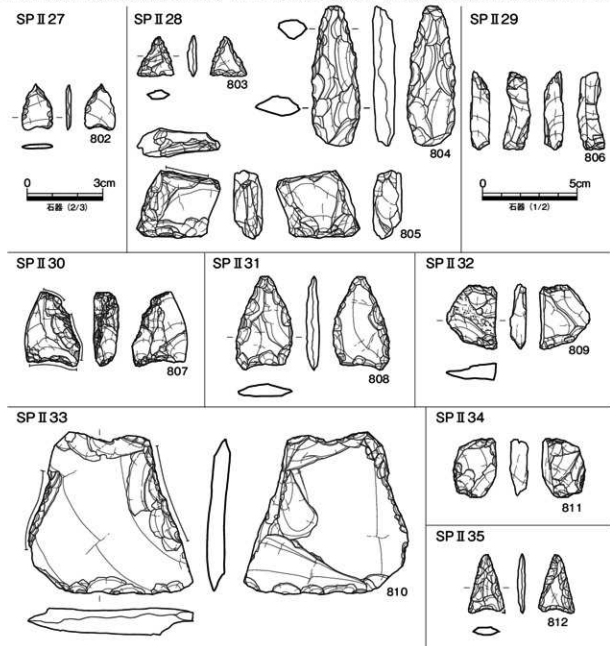


第127図 SK II 22、II 23、SD II 03、SX II 09 平・断面図、出土遺物実測図

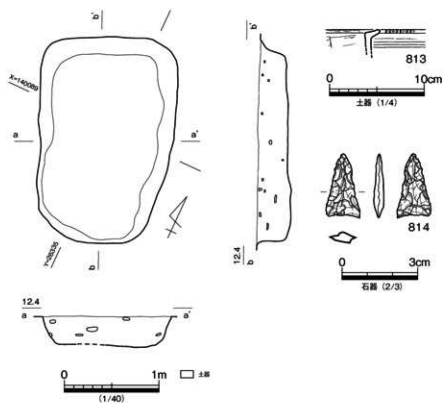
このほかのⅡ区の弥生時代の遺構

以下は、弥生時代の遺構と考えられるものの、詳細な時期の不明な遺構である。第128図802～811は、Ⅱ区（平成7年度調査区）で検出したピットから出土した石器の実測図である。SPⅡ27出土の802は、わずかに凹む平基式の石鏃である。薄い剝片を用い簡略な細部調整で整形している。SPⅡ28から出土した804は凸基式石鏃である。剝離は粗く鋭利な利器には仕上がっていない。805（SPⅡ28出土）、806（SPⅡ29出土）、807（SPⅡ30出土）は楔形石器である。上辺に打撃痕や刃潰れ（806は不明瞭）、下辺に微細な階段状の剝離が見られる。808はSPⅡ31出土の石鏃、809（SPⅡ32）は小片のため不明確であるが削器とした。SPⅡ33出土の810は一側縁に抉り、もう一側縁も器壁を薄くし、刃潰しをしていることから打製石庖丁と判断する。811はSPⅡ34出土の楔形石器である。

812はSPⅡ35出土の石鏃である。SKⅡ24（第129図）は、Ⅱ区（平成7年度調査区）で検出した土坑である。長辺218、短辺142cmのやや不整な隅丸長方形で、深さ32cmの皿状の断面形をなす。少量



第128図 SPⅡ27～Ⅱ35 出土遺物実測図



第129図 SK II 24 平・断面図、出土遺物実測図

827は十分な剥離ができず肉厚の打製石斧である。基部を折損する。828はサヌカイトの敲石である。側縁に敲打痕が認められる。

第131～133図は平成6年度調査区においてSR II 03埋没後にわずかに残った凹地に堆積する層中から出土した遺物の実測図である。829、830は縄文時代晩期の深鉢である。829は口縁端部より5mmほど下がった外面に「O」字形の刻み目をつけた突帯が巡る。830は口縁端部より1cm下がった外面に突帯を巡らせ、端部に刻み目を施している。831～834は弥生時代前期の壺口縁である。831は頸部に7条以上、832は頸部に3条のヘラ描き沈線を施す。833は3条1単位の構描文を施す。835～842は壺胴部から底部である。胴部最大径付近に835は削り出し状の突帯3条、836は刻み目を付す突帯2条を貼り付けている。843～847は甕口縁部である。摩滅するものが多いがヘラ描き沈線を施す個体が多い。848、849は甕底部、850、851は甕底部、852は蓋形土器である。853～855は弥生時代後期の甕口縁、856は高杯、857は土錘である。

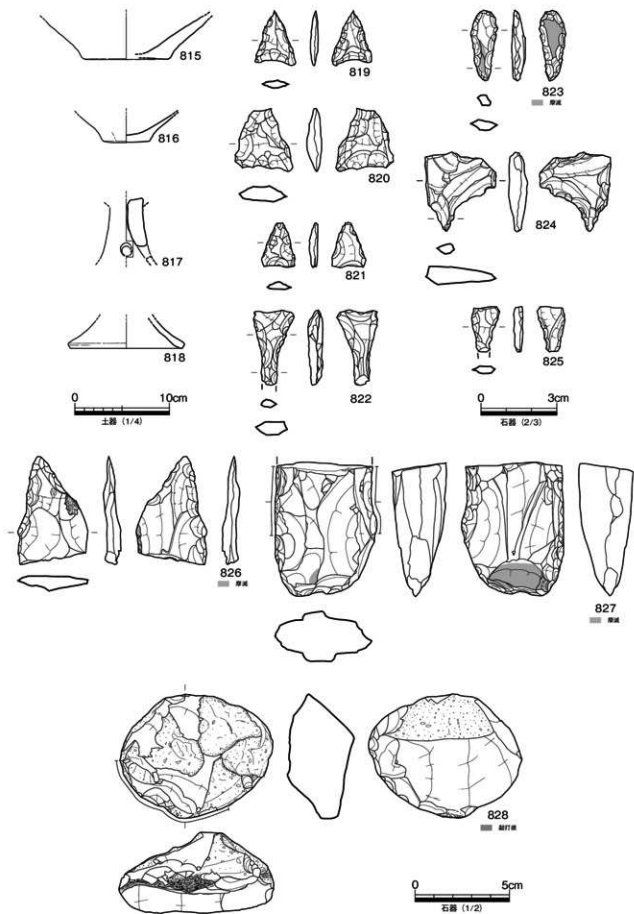
858～888は石器の実測図である。858～871は凹基式の石鏃である。風化したものが多い。869は剥片の側縁のみを細部調整して整形している。870と871は側縁に抉りを入れた五角形鏃である。872、873は平基式の石鏃、874は凸基無茎式、875は凸基有茎式の石鏃である。876～882は石錐、883と884は完形の打製石砲丁である。885は安山岩製（風化する）の打製石斧。刃部に摩滅が見られる。886は砂岩製の太型蛤刃石斧である。刃部は使用に伴い摩滅している。887はサヌカイト製の敲石、縁辺が敲打によって潰れている。888は表裏に砥面が見られる安山岩製の砥石である。

本包含層には縄文時代晩期～弥生時代後期の遺物が包含されている。

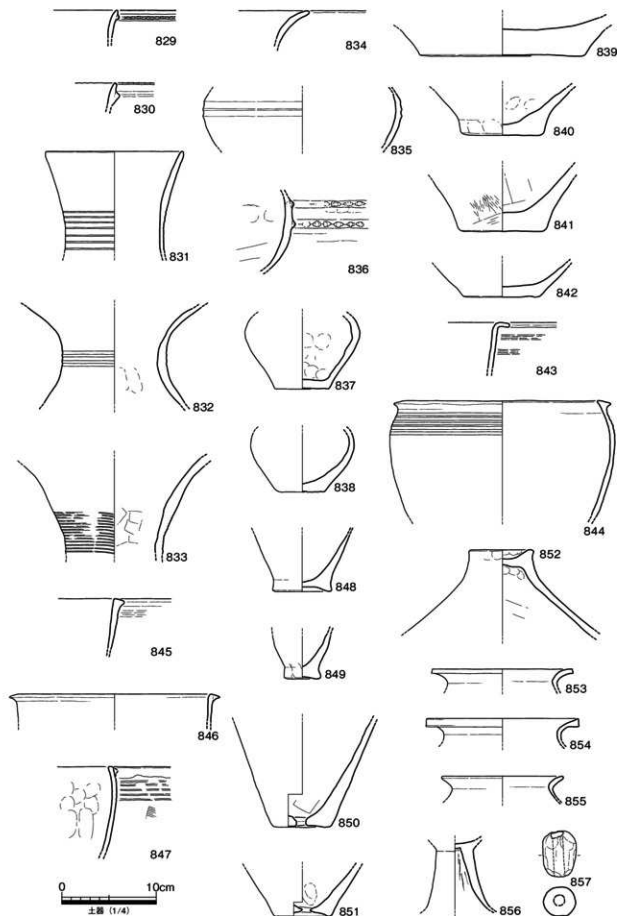
の弥生土器片が出土しているが詳細な時期は特定できない。

## II 区の弥生時代後期の包含層

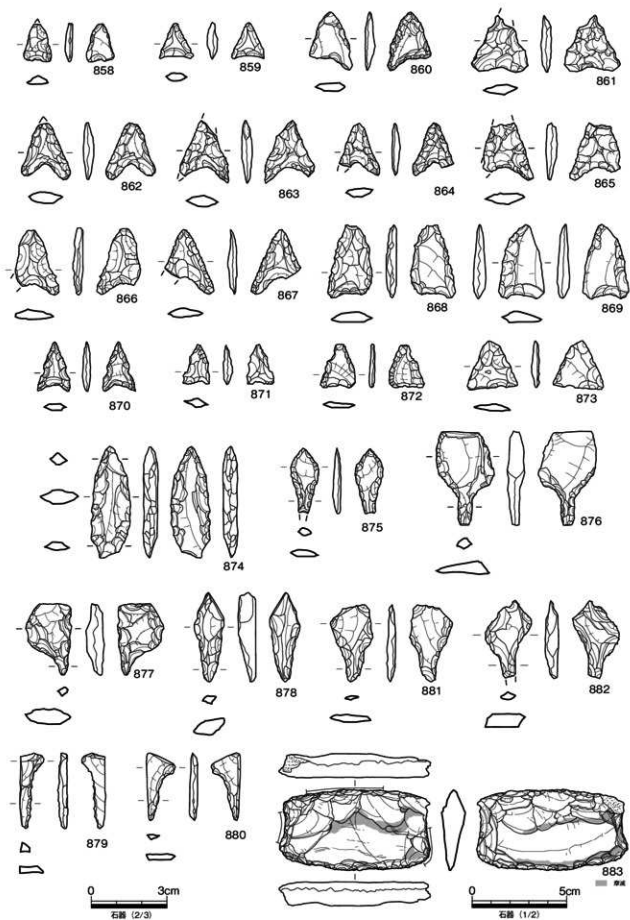
II 区にはSR II 03埋没後に残ったわずかな凹地などに弥生時代後期の包含層が形成されている。第130図815～828は平成7年度調査区における包含層出土の遺物実測図である。弥生時代前期と後期の遺物が混在する。石鏃（819～821）、石錐（822～825）が出土している。826は石槍未成品とした。刃部の石材内に異質物の混入箇所があることから作成途中で放棄されたものか。



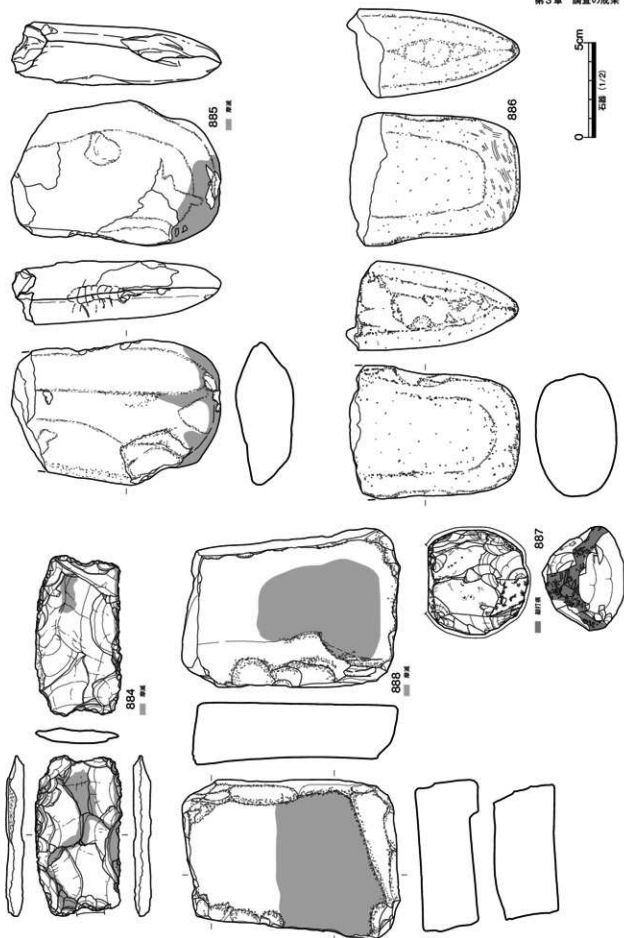
第 130 図 II 区弥生時代後期の包含層 出土遺物実測図 (1)



第131図 II区弥生時代後期の包含層 出土遺物実測図(2)

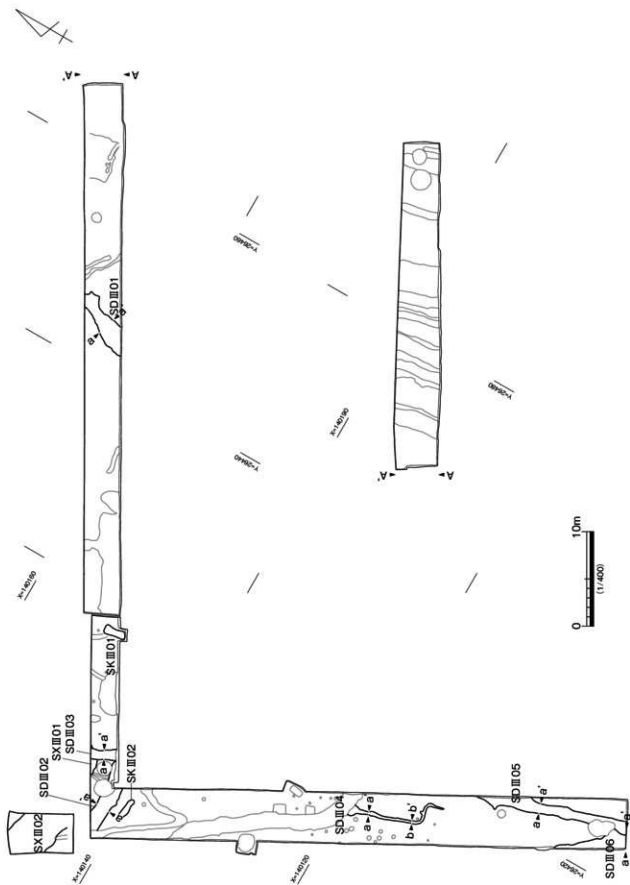


第132図 II区弥生時代後期の包含層 出土遺物実測図(3)



第133図 II区弥生時代後期の包含層 出土遺物実測図(4)

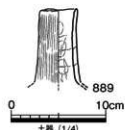




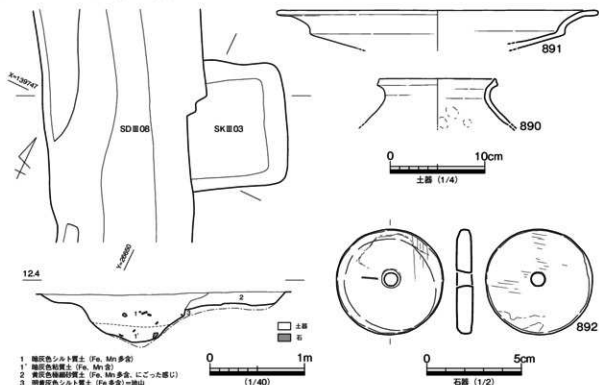
第134図 III区弥生時代後期遺構 平面図

## Ⅲ区 (第134図)

Ⅲ区の弥生時代後期の遺構についてSPⅢ01、SKⅢ03～Ⅲ06、SEⅢ01、Ⅲ02、SDⅢ07、Ⅲ08、次にやや消極的な根拠ながら弥生時代後期の遺構と考えられるSPⅢ02、SDⅢ09～Ⅲ19の順で報告する。第135図889はSPⅢ01から出土した。Ⅲ区からは12基ばかりのピットが検出されているが、明確な時期のわかるものはほとんどない。



第135図 SPⅢ01 出土遺物実測図

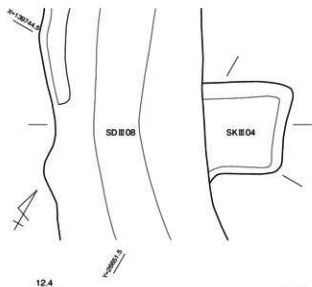


第136図 SKⅢ03 平・断面図、出土遺物実測図

## 土坑

## SKⅢ03

Ⅲ区で検出した土坑である。SDⅢ08に一部を壊される。平面形は矩形と考えられ、残存部の東西幅は1.1m、南北幅1.3、深さ0.2mの規模である。断面形は皿状である。遺物小片が微量出土している。第136図890は明瞭な稜をもたずに緩やかに外湾する口縁で、端部をそのままおさめる甕、891は大きく外湾する口縁部をもつ高杯である。892は緑泥岩製の紡錘車である。穿孔は片面からなされている。



- 1 黄褐色粘質砂質土 (Fe・Mn多量) にこびり付
- 2 暗灰色シルト質土 (Fe・Mn多)
- 2' 暗灰色粘質土 (Feわずかな)
- 3 暗褐色シルト質土 (Fe多量)→埋土

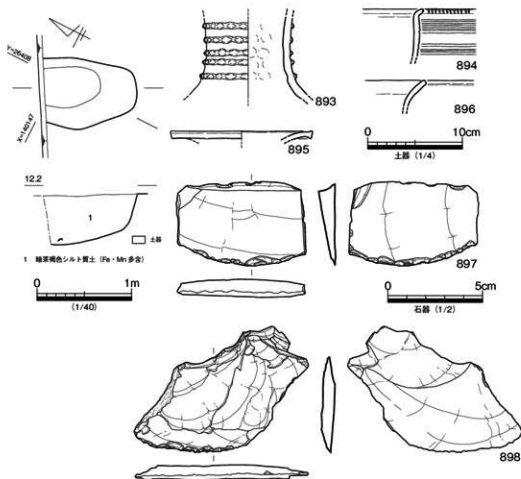
第137図 SK III 04 平・断面図

### SK III 04

Ⅲ区で検出した土坑(第137図)である。SD III 08に壊される。平面形は矩形と考えられ、残存部の東西幅1.0m、南北幅0.8、深さ0.24mの規模である。断面形は東側では急で西に向かって緩やかに浅くなる形状である。遺物片数点が出土したのみであるが、規模・形状、埋土の類似性から2mほど北に所在するSK III 03と同時期の遺構と考える。

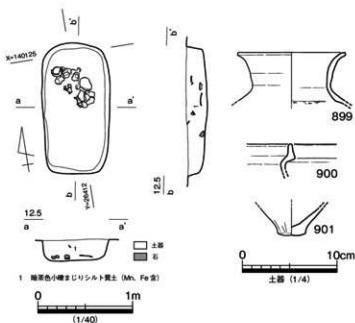
### SK III 05

Ⅲ区で検出した土坑と考えられる遺構、北側は調査区外に延びる。長辺1.0以上、短辺0.7、深さ0.5mの規模で、断面形は



第138図 SK III 05 平・断面図、出土遺物実測図

箱形を呈する。弥生時代前期を中心に少量の弥生時代後期の遺物の破片が28%コンテナ1/8箱分出土している。第138図893は頸部に「O」字形の押捺文のある突帯を5条貼り付けた壺、894は如意状口縁で端部に刻み目、胴部に多条のヘラ描き沈線を巡らせた甕である。895は壺口縁、896は甕口縁の破片である。897、898は削器、898は片面からのみ細部調整を施して刃部としている。SKⅢ05は895、896から弥生時代後期の遺構と判断する。



第139図 SKⅢ06 平・断面図、出土遺物実測図

### SKⅢ06

Ⅲ区で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、長辺方向は座標北から9°東に振る方向である。長辺1.4、短辺0.7、深さ0.2mの規模で、断面形は箱形を呈する。底面には接さずに浮いた位置から土器の破片少量、自然礫少量が出土している。弥生時代前期のものを中心とし、後期の遺物が少量含まれる。第139図899は外反気味に立ち上がる頸部から緩く屈曲する短い口縁の壺、900は甕口縁部の小片、901は円盤状に突き出す平底の鉢である。形状から墓の可能性を考え埋土の水洗選別を行ったが、特記する情報は得られなかった。

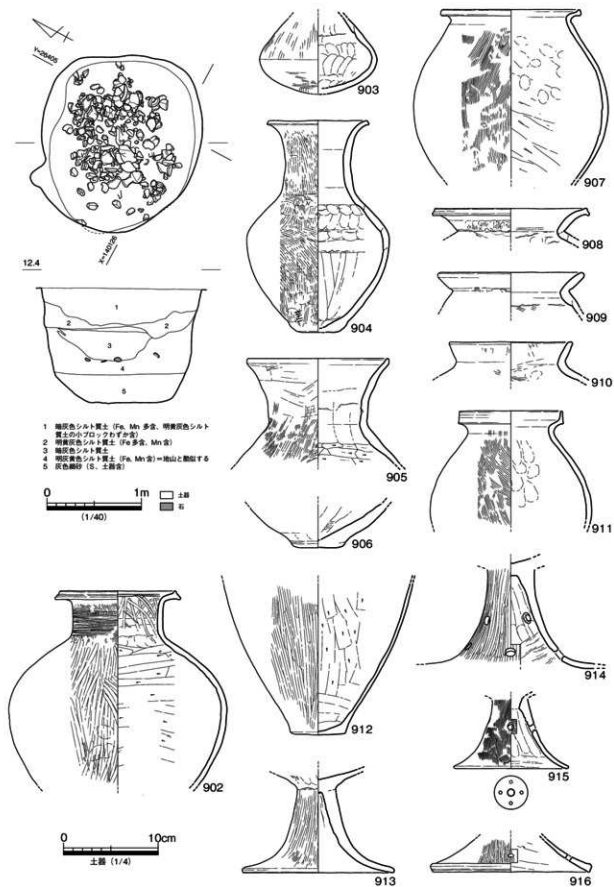
### 井戸

#### SEⅢ01

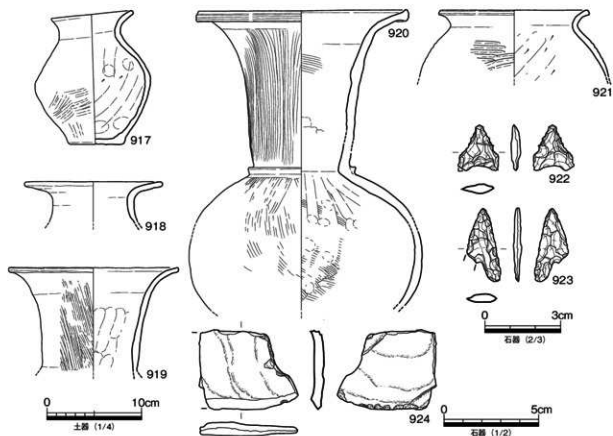
Ⅲ区で検出した井戸である。長径2.0、短径1.8mの円形で、深さ1.2m、断面形は筒形を呈する。底は扇状地の基盤層と考えられる砂礫層を掘り込んでおり、調査時でも湧水が見られたことから井戸と判断する。断面図1～3層を上層、4、5層を下層として遺物を取り上げ、28%コンテナ2箱分が出土しているが、遺物が集中するのは底と2層下面で、底付近では拳大の砂岩礫と共に、比較的大きな破片の土器が出土し、井戸の機能を喪失し土坑状になった段階で完形近くに復元可能な土器片が集中して投棄されたと考えられる。

第140図902～916は下層出土の遺物実測図である。902の広口壺は口縁端部を肥厚させ、頸部にはハケの後に半裁竹管による沈線が施される。903は長頸壺のイチジク形の胴部である。904の壺は、平底の底部から縦線をおびた肩の少し張る胴部、「ハ」字形にすぼまりながら明瞭な稜を持たずに筒状の頸部に移行し、緩く外反して口縁部をつくる。端部はそのままおさめている。907～911は甕の口縁部である。端部をわずかに上に摘み上げるもの(907)、四角におさめるもの(908)、外湾して開いてから垂直方向に立ち上がる口縁部を有するもの(911)がある。913～916は高杯の脚部である。913、915は「ハ」字形の脚部が大きく開きながら脚端に至る。端部は丸くおさめている。916は香東川下流域産である。

第141図917～924は、上層出土の遺物実測図である。917は弥生時代前期の壺、完形に近いが混入と考えられる。918は広口壺、919、920は長頸壺である。918、919の口縁端部はそのままおさめるが、



第140図 SE III 01 平・断面図、下層出土遺物実測図



第141図 SEⅢ01 上層出土遺物実測図

920はわずかに肥厚させ沈線2条を巡らす。また、920は頸胴部の境界に突帯をめぐらせている。921の甕は、外面にタタキ目を残し、内面は頸部付近までヘラ削りを施している。924は安山岩製の打製石庖丁である。

SEⅢ01は、上下層で大きな時期差は見られず、真鍋編年V-4期に属すると考えられる。

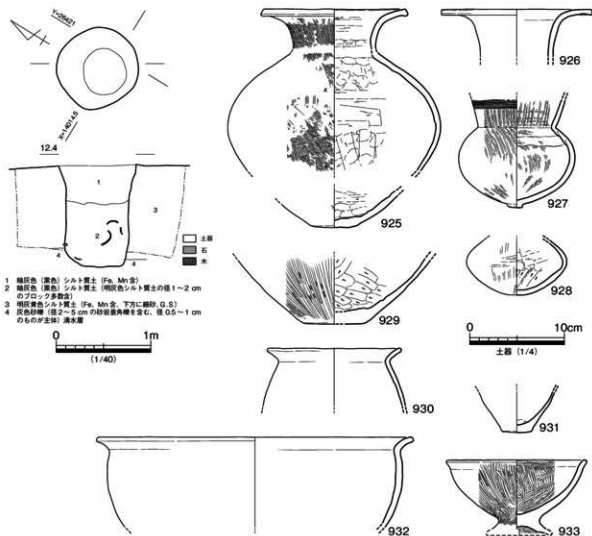
### SEⅢ02

Ⅲ区で検出した井戸である。直径0.8mの円形の平面形で、深さ1.1mの筒状の断面形である。底面が砂礫層を15cmほど掘り込んでおり、湧水が見られることから井戸と判断する。28ℓコンテナ1箱弱の遺物が出土している。このうち第142図927を底面直上で検出した以外は、埋土中から接合できない破片となって出土している。925は緩やかに外反する口縁で、端部をそのままおさめる広口壺である。底部の丸底化が進んでいる。927はやや偏平な球状の胴部で、底部に径1.5cmほどの痕跡的な円盤を付す。頸部は外上方に立ち上がり、ヘラ描き沈線と櫛描き波状文が巡る。932の鉢は「く」字形に屈曲し、外上方に向く短い口縁部をもつ。933は内外面ハケの後にヘラミガキを施した台付鉢である。SEⅢ02は弥生時代後期末に下る遺構と考えられる。

### 溝状遺構

#### SDⅢ07

Ⅲ区で検出した溝状遺構(第143図)である。N-36°-WとN-3°-Wの方向にV字形に屈曲



第142図 SE III 02 平・断面図、出土遺物実測図

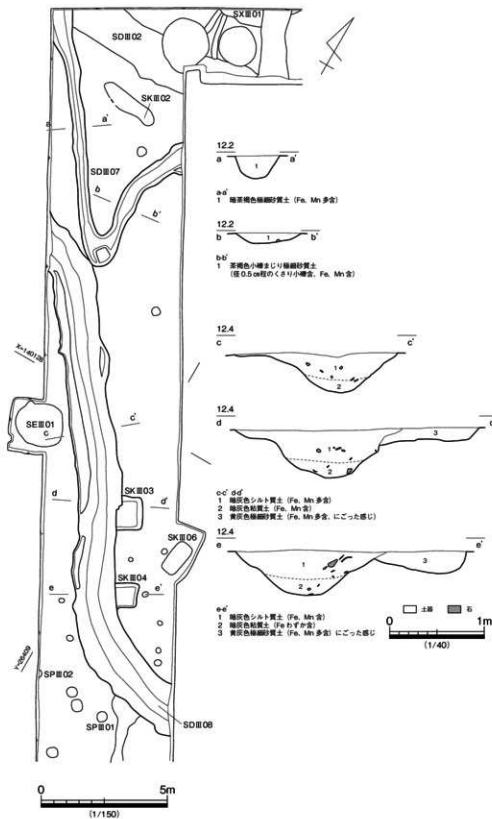
する流路をとる。SD III 02 より新しいが、SD III 08 との前後関係は不明である。検出長は152mで、西の流れは幅0.5、深さ0.24m、東の流れは幅0.7、深さ0.1mを測る。断面形は西側ではU字、東側は皿状を呈する。遺物細片が散在する状況で出土している。出土量は小ザル1杯ほどである（第144図）。

### SD III 08

Ⅲ区で検出した、やや蛇行しながら東南から西北方向に流れる溝状遺構（第143図）である。検出長は20.3mで、幅1.8、深さ0.5mの規模で断面形は椀状を呈する。埋土は暗灰色シルト質土の上層と暗灰色粘質土の下層に分けられ、上層（一部下層も混じる）で28個コンテナ6箱、下層で2箱の遺物が出土している。遺物は溝の底や斜面などに集中するのではなく、埋土中に破片が散在する状況である。

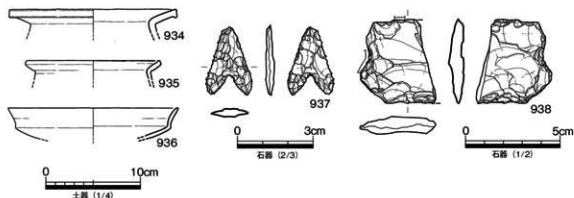
第145図939～958は下層出土の遺物実測図である。939～944は壺とした。939の壺は口縁端部を拡張し竹管文を施す。941は胴部内面を頸部付近までヘラ削りしており、新しい様相を持つ。942も新しい様相を持つ。945～947は甕、948～952は高杯である。953は石甌未成品、956～958は楔形石器と考える。957は折損した打製石斧を転用したと考える。

第146、147図959～993は上層出土の遺物実測図である。959は頸部に2条のヘラ描き沈線を巡ら



第143図 SD III 07、III 08 平・断面図





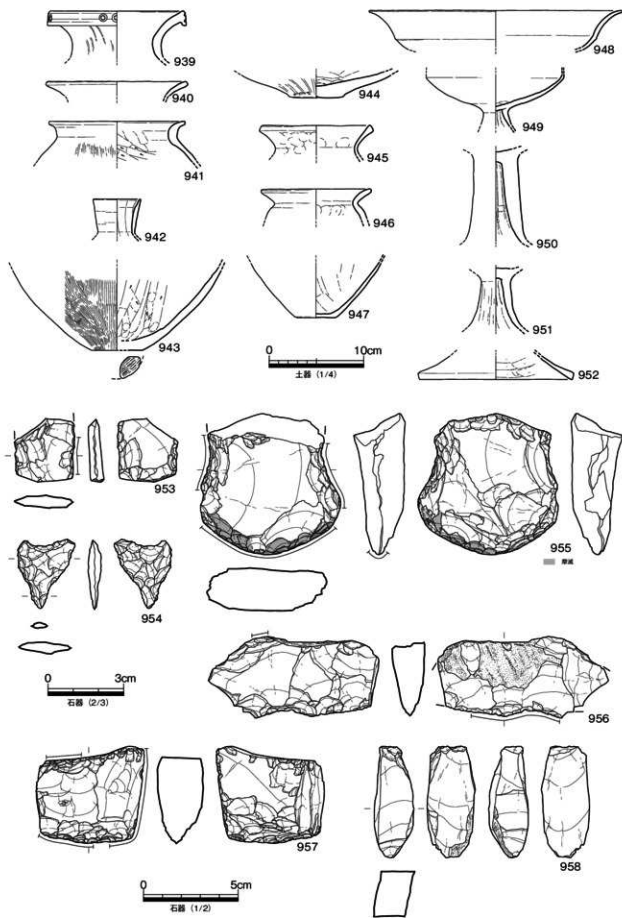
第 144 図 SD Ⅲ 07 出土遺物実測図

す弥生時代前期の壺である。960～963は広口壺。口端部の拡張は見られない。960は頸部に刺突文を巡らす。964は長頸壺の頸部片である。頸部と胴部の境界に刻み目を施した突帯を貼り付けている。965は、やや内傾する立ち上がりの二重口縁の壺で、外面に鋸歯文が認められる。SD Ⅲ 08 出土遺物の中では新しい様相をもつ。969～971は平底であるが丸底化が進む底部である。973は香東川下流域産の甕、974の甕は小さな平底、砲弾形の胴部から緩く折り曲げる、折り曲げ口縁である。976は尖底頂部に一孔を穿つ独立した器種としての甕である。977～979は高杯の口縁部、978、979は外反する口縁部である。983は透かし穴を2段に持つもので器台と考える。984は浅めの半球状の胴部の鉢、底部は欠損するが少し突出した平底の底部がつくと思われる。987は石匙、988の削器は刃部にわずかに摩擦が見られる。989は一部に2cm近い厚みを残した素材の一辺に刃部をつくった削器である。993は安山岩製の敲石である。上下端に敲打による割れ、潰れが見られる。

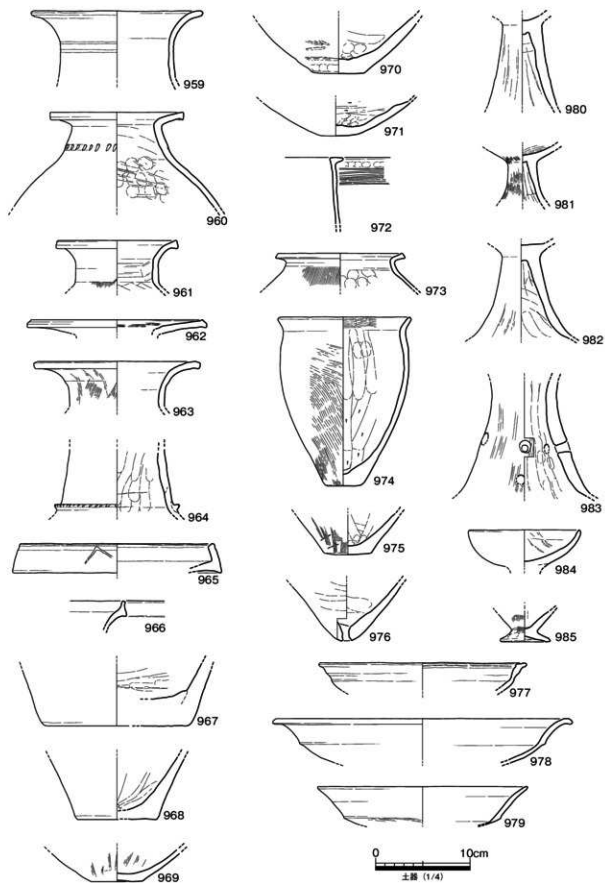
第148、149図994～1012は、上下層の分離ができなかった出土遺物の実測図である。994～996は壺、997～999は甕である。997は香東川下流域産、998、999は肉厚の胴部から緩く屈曲する短い口縁である。1000は不明瞭ながら平底を有する鉢、1001～1003は高杯である。1001は浅く内湾気味に立ち上がる杯部から屈曲して外上方に湾曲する口縁部、脚部は円柱から「ハ」字形に広がり脚端部はそのままおさめている。複数の円形透かし穴がある。1103は杯接合部から屈曲をもたず外反して裾端部に至る。端部は外側にやや拵みだすように仕上げている。1004は器台である。ラッパ状に開く口縁を焼成前に円弧状に切り取り受け部を成形している。

1008は緑泥岩製の磨製石斧片である。小片のため器種はわからない。1009は剥片化した楔形石器とした。SD Ⅲ 04 出土の651と遺構間で接合している。1010は石核、1011、1012は2次加工のある剥片とした。

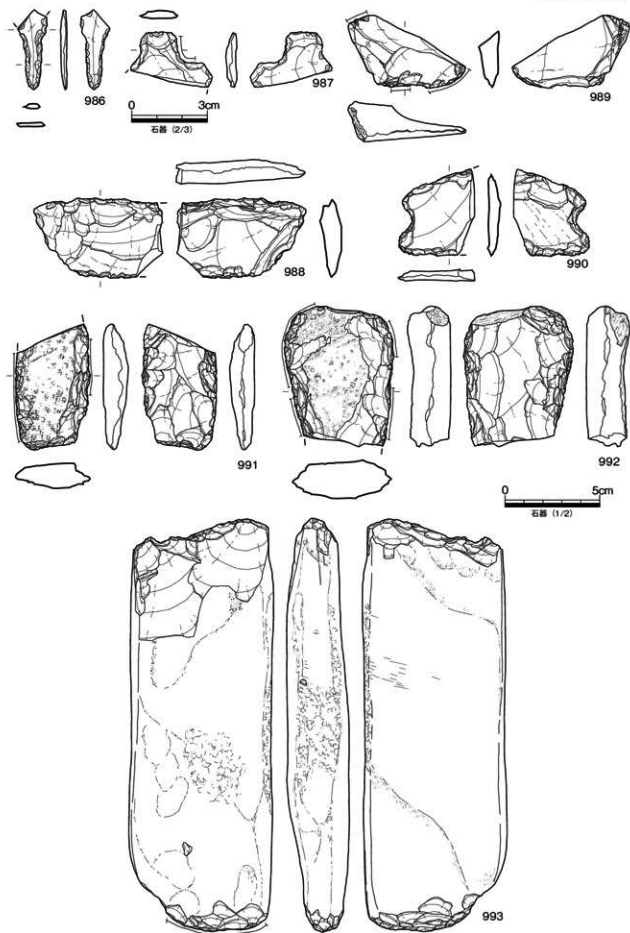
SD Ⅲ 08 出土遺物は真鍋V-4期ころの良好な資料と見られたが、新しい様相の遺物が微量混在し、下層から出土している。本遺構は2mグリッドで遺物を取り上げているが、新しいものは集中するのではなく、広範な位置から出土しており、当該期の遺構を見落として一緒に掘りあげたということではないようである。また、古い様相の遺物も相対的に大きな破片ではあるものの、埋土中に浮いた位置で出土していることから、SD Ⅲ 08の埋没時期は新しく考えるべきで、真鍋V-7期に下る時期と考える。



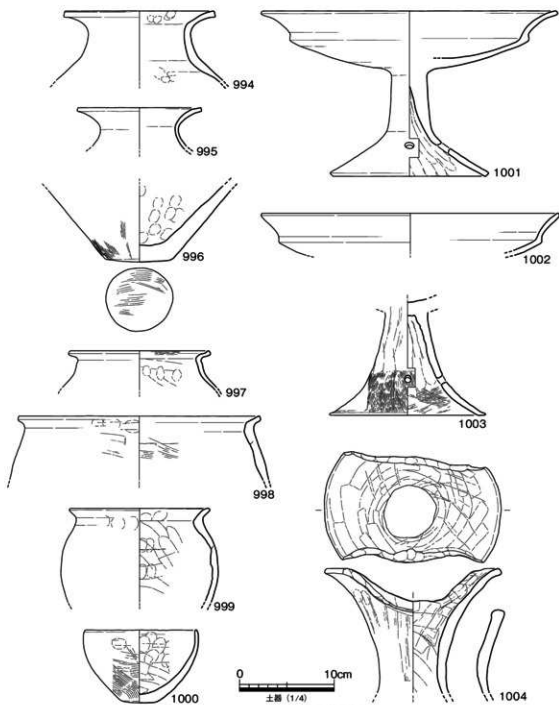
第145図 SD III 08 下層出土遺物実測図



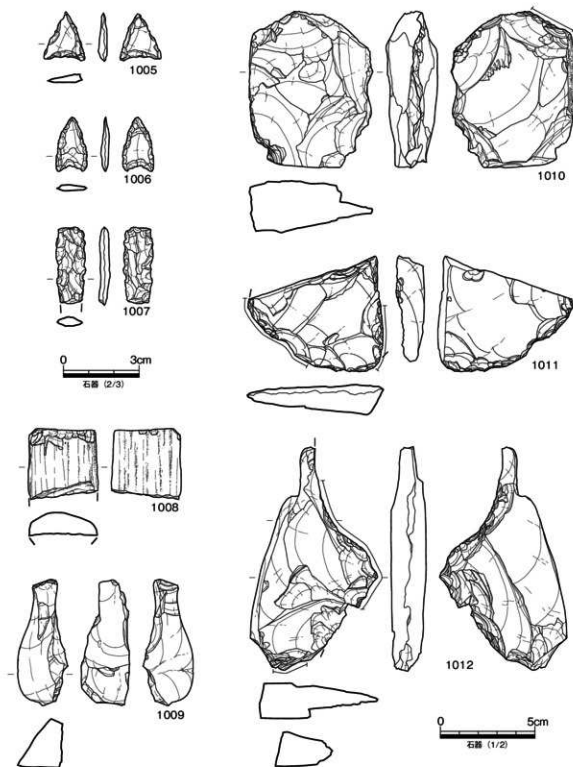
第146図 SD III 08 上層出土遺物実測図(1)



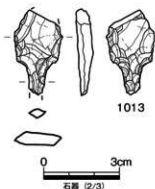
第147図 SD III 08 上層出土遺物実測図(2)



第148図 SD III 08 出土遺物実測図(1)



第149図 SD III 08 出土遺物実測図(2)



第150図 SP III 02 出土遺物実測図

#### このほかのⅢ区の弥生時代後期の遺構

以下に消極的な根拠ではあるが、弥生時代後期と考えられる遺構を報告する。

#### SP III 02

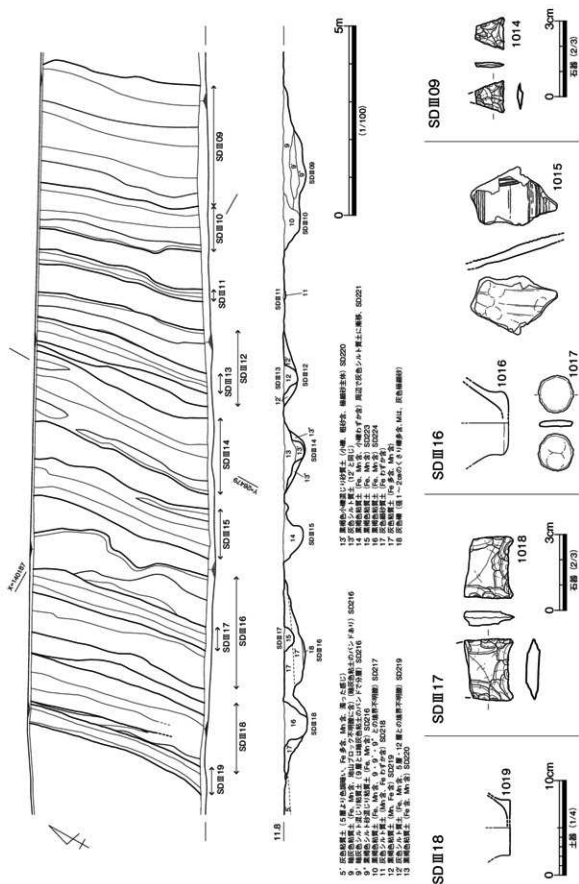
Ⅲ区のSP III 02から石鏃(1013)が出土している。Ⅲ区SPはほぼすべて弥生時代の遺構と考えられる。

#### SD III 09～SD III 19

Ⅲ区東端付近で検出した溝群である。18mの幅の中に複数の溝が座標北から11～20°西へ振ったほぼ同一の方向に掘られている。これらはある溝が埋没したあとに再掘削されたもの、見かけの上で平行して流れるものがある。埋土の様相が類似することから短い時期幅でとらえられると考えるが、遺物の出土量は極めて少なく、並存状況はよくわからない。

SD III 09は幅4、深さ0.55m、断面形は浅い椀形、40点あまりの土器細片が出土している。図化可能な破片はない。胎土は弥生時代前期の特徴を示すものが多いが特定できない。平基式の石鏃(1014)が出土している。SD III 10はSD III 09の埋没後に掘られた溝状遺構である。幅0.9、深さ0.4mで椀形の断面形、遺物細片若干量が出土したのみである。SD III 11は幅30、深さ4cmほどの小溝。遺物は出土していない。SD III 12は幅1.2、深さ0.4m、椀形の断面形、遺物細片若干量が出土したのみである。SD III 13はSD III 12埋没後に掘られたもので、幅0.7、深さ0.3m、椀形の断面形、遺物は出土していない。SD III 14は幅1.5、深さ0.5m、下層ではU字形の断面形、同一個体と見られる弥生土器片が若干量出土している。図化不能であるが、弥生時代後期の可能性がある。SD III 15は幅1、深さ0.5m、椀形の断面形、弥生時代後期の甕口縁と考えられる破片(図化不能)ほか若干量の遺物が出土している。SD III 16は幅2.6、深さ0.7m、浅い椀状の断面形の溝状遺構で、SD III 18と共通する埋土である。小ザル1つ分の遺物片が出土している。1015は壺胴部で数条からなるヘラ描き沈線帯が2帯巡り、その間に垂直方向のヘラ描き沈線(3条以上)が施される。1017は土器片を加工した円盤状土製品である。SD III 17はSD III 16埋没後に掘られた溝状遺構で、幅0.7、深さ0.3m、U字形の断面形、平基式石鏃の基部片が出土しているが、土器は数点の細片が出土したのみで時期はわからない。SD III 18は幅1.5、深さ0.6m、椀形の断面形の溝で、SD III 16と溝内の盛り上がりによって区別されるものである。258以外は数点の土器細片が出土したのみである。1019は甕底部の摩滅する小片である。弥生時代後期のものと考えられる。SD III 19はSD III 18埋没後に掘られた溝状遺構で、幅0.5、深さ0.25m、浅い椀状の断面形、遺物は出土していない。

SD III 09～Ⅲ19は遺物の出土量が僅少で、時期の特定が難しいが、溝群のなかでは古いと考えられるSD III 14やSD III 18から弥生時代後期の遺物片が出土していることから、弥生時代後期の溝群と判断する。



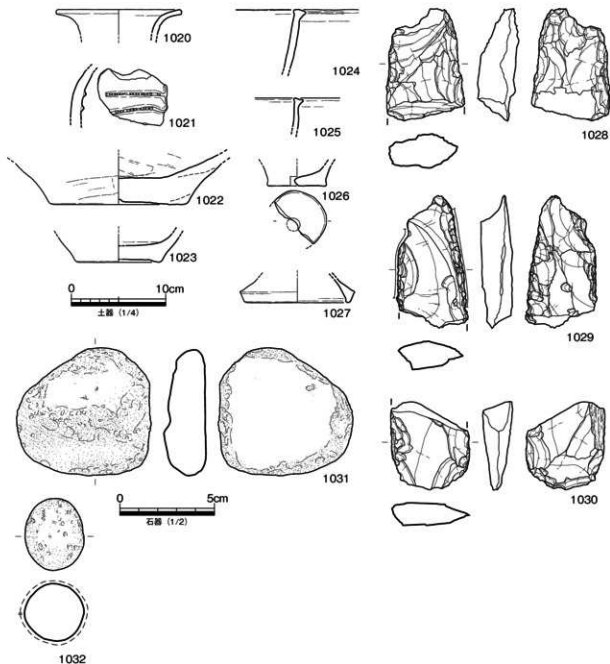
第151図 SD III 09～III 19 平・断面図、出土遺物実測図



Ⅳ区

弥生時代後期の包含層

Ⅳ区には弥生時代後期の遺構は確認されていないが、Ⅳ区（スタジアム部分）のSDⅣ01付近に、弥生土器を包含する黒色の包含層の存在が記録されている（平面的な広がりについては記録を欠く）。28㊦コンテナ1箱分の遺物が出土しているが、土器の多数は弥生時代前期のものと見られ、少量の弥生時代後期と考えられる土器片が含まれる。本層はⅡ区で報告した弥生時代後期の包含層と類似するものと把握できる。第152図1020～1027は摩滅する小片である。1021は弥生時代前期の壺であるが、刻み目をもつ2条の突帯と縦方向の突帯を付している。1027は脚端部を下方に突出させる高杯である。1028～1030は打製石斧。1028は安山岩製で、剥離が意図的にできず敲打によって整形している。1031は砂岩重円礫の敲石。側縁に敲打痕が認められる。1032は長断面は楕円形、短断面は円形を呈する磨



第152図 Ⅳ区弥生時代後期の包含層 出土遺物実測図

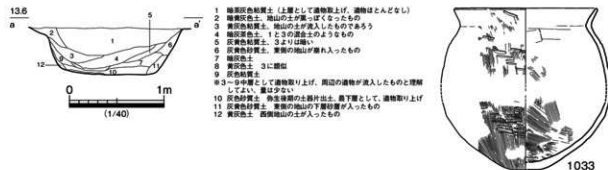
石である。

## V区

### 溝状遺構

#### SD V 01

V区(水路部分)で検出した溝状遺構である。幅1.6、深さ0.5mほどの規模で、断面形は深い皿形である。埋没と掘り直しを繰り返したようで、複雑な堆積構造をしている。少量の遺物片が出土しているが、弥生時代後期に属すると考えられるものが多い。1028は、ほぼ丸底化が進み痕跡的な平底の底部から球状の胴部をもつ。胴部外面はタタキ目を十分に消さないハケ、ハケ後に口縁部を折り曲げる折り曲げ口縁である。真鍋VI期に下る資料である。



第153図 SD V 01 断面図、出土遺物実測図

## Ⅶ区 (第154図)

Ⅶ区からは、弥生時代中期、後期の遺構を検出した。Ⅶ区北側に東西10、南北20mほどの範囲に砂礫層の堆積が見られ、遺物を包含していた。掘り下げると土器棺と考えられる土器が現れはじめたが、精査しても掘り方の輪郭を把握できなかった。この段階で、砂礫層中に完形に近い弥生時代中期の土器が見えはじめた。遺構の掘り方を把握しようと精査を繰り返したが、結果的に砂礫を掘りあげて、地山である茶灰色細砂層の凹凸で土坑や溝状遺構として把握した。なお、砂礫層には級化構造は認められず、また、淘汰不良であることから人為的に埋められたものと考えられる。

以下に弥生時代中期後半の遺構 (SK Ⅶ 01～Ⅶ 03、SD Ⅶ 01、Ⅶ 02)、弥生時代後期の遺構 (ST Ⅶ 01～Ⅶ 05、SD Ⅶ 03～Ⅶ 05)、詳細な時期は不明であるが、埋没過程の弥生時代後期に土地利用 (SX Ⅶ 01) がなされているSR Ⅶ・Ⅶ 01の順に報告する。